



令和3年度

# のじぎく文芸賞

2021 Literary Works



## 発刊にあたって

少子・高齢化や情報化の飛躍的な進展など、人々の価値観や生き方の多様化に伴い、人権課題は近年ますます多岐にわたり、複雑化しています。子どもや高齢者への虐待、学校や職場でのいじめ、セクハラやパワハラ、インターネットを悪用した差別事案など、人権侵害はいまだ後を絶ちません。さらに、コロナ禍という状況のもと、新型コロナウイルス感染者や医療従事者、その家族への差別や偏見、ワクチン接種の有無に関わる問題など、私たちの人権意識が問われるような課題が新たに発生しています。

兵庫県と今年十一月に設立三十周年を迎えました(公財)兵庫県人権啓発協会では、日常生活の中で人権の尊重が文化として定着している社会をめざして「人権文化をすすめる県民運動」を市町と共に展開しています。「のじぎく文芸賞」もその取り組みの一つであり、文芸作品の創作や鑑賞をとおして県民の皆さんに人権について主体的に考え、豊かな人権感覚を身につけていただくことを目的に公募事業を続けて参りました。二十八回目を迎える本年度は、一、六八〇編の作品が寄せられました。いずれも、人の優しさや思いやり、支え合うことのすばらしさ、生命や人権の尊さ・大切さなどが綴られた力作ぞろい、平成六年の第一回公募以来、応募総数は二四、〇二七編となりました。

ご応募いただいた作品の中で優秀なものについては、ひょうご人権ジャーナル「きずな」やラジオ番組での人権啓発に活用して参ります。作品づくりをとおして育まれた人権尊重の心が県民の皆さんに広く発信され、人権文化の定着がいっそう図られることを期待しています。

本作品集には、本年度の応募作品の中から、最優秀賞四編、優秀賞七編を収録いたしました。県民の皆さんにお読みいただくと共に、人権啓発や研修の場でぜひご活用いただき、日常生活での実践につなげていただくことを願っています。

また、多数の作品について、慎重かつ厳正な審査をしていただきました審査委員の皆さんに、この場を借りて心よりお礼申し上げます。

最後になりましたが、今後とも「のじぎく文芸賞」をはじめさまざまな啓発事業などを実施し、県民の皆さんの人権意識の高揚や人権文化の創造に努めてまいりたいと存じますので、どうぞよろしく願います。

令和三年十二月

兵 庫 県

公益財団法人兵庫県人権啓発協会

# 令和三年度 人権問題文芸作品「のじぎく文芸賞」受賞者

名前 作品名 部門(部)

## 〈最優秀賞〉

上松敏治	ゆうやとだいき	小説(一般)
わんにゃん	人生にあつてはならないこと	随想(一般)
後藤益男	雨の交差点	詩(一般)
原口来瞳	歩みだせば、きつと	創作童話(一般)

## 〈優秀賞〉

浜田加代子	前歯とタイガース	小説(一般)
吉延稔	私の中に咲くさくら	小説(学齡児童生徒)
近藤音花	私だからできること	随想(一般)
山下惇斗	差別のない社会へ	随想(学齡児童生徒)
千春	あなたへ	詩(一般)
青木萌結	こころ	詩(学齡児童生徒)
阿江美穂	赤いかさ	創作童話(一般)

※創作童話部門 学齡児童生徒の部 該当作品なし

〈佳作〉

高柳美緒  
内田 壮  
霜坂 映月  
安田 明日香  
東条 幸一  
齋藤 恒義  
塚口 佳子  
井奥 愛花  
近藤 太一  
高松 優子  
長谷川 葵  
パク ヘレナ  
橘田 由加里  
原 哲夫

塗り変えられた『あたりまえ』

いつかカラーをよそえたら

灰色のラベル

まつりのあと、あとのまつり

前を向いて

弁論大会

傘寿の秋、わが想いは深く

みじかな人にも親切を

ありがとうの色

ヘルプマーク

ひとの心に入る時

オリンピックのかがやきのかげで

どじだなあ

シュウくんのかざぐるま

小説(一般)  
小説(一般)  
小説(一般)  
小説(一般)  
随想(一般)  
随想(一般)  
随想(一般)  
随想(一般)  
随想(一般)  
随想(一般)  
詩(一般)  
詩(一般)  
詩(一般)  
創作童話(一般)  
創作童話(一般)  
創作童話(一般)  
創作童話(一般)

# 目次

【総評】	.....	審査委員長	林 芳樹	1
【部門別審査講評】	.....	各審査委員	.....	2
【最優秀賞・優秀賞作品】				
《最優秀賞》				
〈小説部門〉	ゆうやとだいき	.....	上松敏治	23
〈随想部門〉	人生にあつてはならないこと	.....	わんにゃん	39
〈詩 部門〉	雨の交差点	.....	後藤益男	43
〈創作童話部門〉	歩みだせば、きつと	.....	原口来瞳	45

《優秀賞》

〈小説部門〉

(一般の部)

(学齡児童生徒の部)

前歯とタイガース …………… 浜田 加代子 ……  
私の中に咲くさくら …………… 吉延 稔 ……  
63 51

〈随想部門〉

(一般の部)

(学齡児童生徒の部)

私だからできること …………… 近藤 音花 ……  
差別のない社会へ …………… 山下 惇斗 ……  
75 72

〈詩 部門〉

(一般の部)

(学齡児童生徒の部)

あなたへ …………… 千 春 ……  
こころ …………… 青木 萌結 ……  
79 77

〈創作童話部門〉

(一般の部)

赤いかさ …………… 阿江 美穂 ……  
81

◆令和三年度応募作品の内訳

合計	学齡児童生徒 (中学生以下)	一般 (高校生以上)	部
			部門
28	5	23	小説
1,273	1,050	223	随想
346	222	124	詩
33	5	28	創作童話
1,680	1,282	398	応募総数

◆令和三年度審査委員

林 芳樹 (総括)  
時里 二郎 (詩)

野元 正 (小説)  
尾崎 美紀 (創作童話)

三浦 暁子 (随想)

## 総評

審査委員長 林 芳樹

とても心に残った高校生の話を二つ。

一つは昨年暮れのことです。たつの市の道端にある深い溝に小学校4年生の女兒が落ちてしまいました。連絡を受けた家族が駆けつけると、女兒は助け上げられていました。救ってくれたらしい男子高校生はその場を離れ、後ろ姿が遠くに。事情を聞いたすぐ近くにある高校の校長先生は、助けたのが自校生ではと思って全校放送で呼び掛けたそうです。すると当時3年生だった男子高校生が名乗り出ました。「たいしたことじゃないんだけどなあ」と。

もう一つは今年6月の出来事です。神戸市長田区の路上で高齢の女性が座りこんでいました。足を投げ出しています。そこを通過して女性と目が合った女子高校生が「大丈夫ですか」と話しかけました。「立てないの」と言う女性に両手を差し伸べ、ゆっくりと歩き始めました。でも歩き続けるのは難しいなと判断して、最寄りの交番へ。女性は入院先から外へ出てしまっていたのです。無事に戻ったことで、県の善行賞「のじぎく賞」を受けたとき、その女子生徒は一言、「たいしたことはしてない」と。

街中でのささやかな話です。でも、伝える新聞記事を読みながら、よんだ気分がすっきりしたように思いました。ほんのちよつとの勇気が心を明るくしてくれると思つたのです。

今年ものじぎく文芸賞の審査でたくさんの応募作を読みました。読みながら、心のもやもやが消えていくような気持ちに何度もなりました。コロナ禍でつらい話を見聞きし、息苦しい時代だからかもしれませんが、さまざまな視点で、忘れてはいけない大事なことに向き合った作品ばかりです。ぜひ冊子をお読みください。

きつと、重苦しい霧なんてどこかへ吹っ飛んでしまいます。



## 部門別審査講評

### 【小説部門】

審査委員 野元 正

《審査総評》（一般の部と学齡児童生徒の部を含めて）

今年度の小説部門の応募総数は、28篇でした。その内訳は一般の部23篇、学齡児童生徒の部5篇でした。令和2年度の応募総数31篇（一般21篇、学齡児童生徒10篇）ですから、学齡児童生徒の応募が半分に減少していますが、総数では昨年に近い応募をいただきました。

コロナ禍でテレワークや不要不急の外出自粛など在宅時間が長くなり、家庭内暴力、虐待など諸問題がクローズアップされ、「人権問題」の大切さも改めて再認識する必要があります。今回の応募作品を読んで感じたことは、「いじめ」「差別」「障がい」など、具体的な現代社会の諸問題を直接的に読者に訴えるのではなく、「人のやさしさ」「思いやり」「連帯」「命や人権の尊さ」といったフアクターを物語のなかに巧みに組み込んで文学的に昇華させ、読者に自然にその大切さを感じさせる作品が多かったということです。選考もそのような視点で将来に光明を感じさせ、読後感の爽やかな作品を選んだつもりです。

〈最優秀賞〉（一般の部と学齡児童生徒の部を併せた全作品より）

作品名「ゆうやとだいき」 上松 敏治

同じマンションに住むゆうやとだいきが知り合ったのは、小学校に入学する直前だった。

二人は鬼ごっこや昆虫採集などいつも一緒のかけがいのない日々を過ごす。だいきはゆうやが吃音であることに気づくが、それを気にすることなく接した。しかしゆうやは、子ども世界の残酷な

いじめに遭遇するが、いつも笑顔で対応。だいきは何回かゆうやを露骨にいじめる友だちを責めたがそんなとき、ゆうやが子ども世界に生まれる緊張した雰囲気を好まないことを知ってあまり触れなくなつた。やがて、二人は会話の少ないサッカーボールの蹴り合いに興ずるようになり、サッカーへの情熱を互いに高め、二人の絆も強くなつていった。

ゆうやの担任(だいきは別のクラス)は、ゆうやの吃音のためによかれといろいろ試みる、が、それがかえつて子どもたちの差別意識に繋がる。ゆうやとだいきは小学2年生のとき地元のサッカークラブに入る。練習を欠かさない二人の技術は次第に周囲を凌駕していく。

二人はサッカーを通じてさらに友情を深めていったが、だいきは6年生の夏に、ゆうやが父親の仕事の都合で九州に転校することを知る。引越しを前に、ゆうやの母親は、だいきの存在に感謝し、吃音がいじめられる人生を暗示しているが、今はそれを乗りこえ、吃音が一生治らなくてもゆうやがしあわせに生きてくれることを望んでいるという。ゆうやが引越す前、ふたりにとって大事なサッカー大会は決勝戦の前にPK戦で敗れるが、その描写は少し長いが圧巻だ。サッカーを通じて育まれた友情は障がいの友との絆とスポーツの意義を高める秀逸な作品だ。

〈優秀賞〉(一般の部)

作品名「前歯とタイガース」 浜田加代子

昭和60(1985)年(阪神タイガース優勝の年)、小学4年生直人はみんなと一緒に机を運んだりするのが苦手で、独りでできる廊下掃除をしていたとき、同じクラスの俊介と潤にからかわれ突き飛ばされ永久歯の前歯を2本折る。直人は挨拶や言葉が巧く話せないが、算数と漢字テストはいつも100点だったが、物語のなかの主人公の気持ちはどうしても理解できないし、急な予定変更などには対応できなくてパニックになることが多かった。

直人は父の仕事の都合で引越すこととなった。慣れない街へ行くことは嫌だったが、我慢した。別れ際に俊介と潤がはじめで直人の前歯を折ったことを詫びに来た。

それから15年が経った。直人は25歳。直人はトラブルを抱えて苦悩の日を送っていた。大学も中退。周りの人に合わせられず苛つかせてしまうので仕事も長続きしない。言われたことは出来るが、自分で段取りして進めることは出来ない。そんなとき直人は、母の強い薦めで大学病院の診察を受け、診断結果を知らされる。診断から3年が経過したとき、タイガースファンの直人は、甲子園球場であの俊介と潤に再会する。観戦後、3人は居酒屋で飲んだ。そこで直人は診断結果をカミングアウト。俊介は分からなかったが、障害者施設の相談員の潤は、知っていた。昔は変な奴と思っていたが、今は違う。研究が進んで、世の中に知られて、支援も広がるから大丈夫だと直人を励ました。

俊介と潤は改めてあのととき怪我させたことを詫びる。3人は直人との再会と阪神タイガースの優勝を願って乾杯した。直人の心に勇気が湧き、何かやれることもあると思いはじめた。発達障害に苦しむ人や状況がつぶさに描かれた佳編だ。

〈優秀賞〉(学齢児童生徒の部)

作品名「私の中に咲くさくら」

吉延 稔

中学生になったばかりの私には、家族のように振る舞ってくれるやさしくて仲の良いおばあちゃんがいる。彼女は私に希望と勇気を与えてくれる美しい桜みたいな人になりなさいと言っていた。中学生になる前には人間関係に不安を抱いていたが、友達も出来たし、楽しい。私は図書館で事故で車椅子生活を余儀なくされている同じクラスの渡会君と話をするようになり、互いに部活は美術

部に入ると聞いて親しみが湧いた。そこで車椅子生活について聞くうちについて、〈……大変なのね。可哀想に〉と不用意な一言を言ってしまったのだ。彼は驚きと悲しみの混じった複雑な表情で突然、帰ってしまった。それから会えないでいる。私はおばあちゃんの家で相談に行った。私が経緯を話すと、彼女も同じような話を車椅子生活者から聞いたことがあるという。同情や哀れみの目で見ないで、普通の友達として接してほしい、と。そして渡会君を傷つけたと思うなら素直に謝れと言った。

そこで私は渡会君に謝る。彼もつれない素振りをしてすまないと思っていたという。

渡会君は担任の先生と相談して、ホームルームの時間に、車椅子に乗っている僕だけ特別扱いしないで出来るだけ健常者と同じように接してほしい、と頼んだ。すると、クラスメートから次々と、そんな気持ちにさせてごめん、という声が上がった。教室は暖かい雰囲気にも包まれた。その日から渡会君は前より生き生きとしていて楽しそうに見えた。

私は「桜みたいな人」の意味が分かったと報告しようとおばあちゃんの家に向かったが、家は見つからず、桜の大樹のみ立っていた。私はそこでおじいさんに遭い、桜の木は御神木で悩みのある人だけ、老婆が現れて解決の道しるべを示してくれるという伝説があると聞く。ラストの神秘的な余韻も良いが、障がい者の心理を読者に巧みに伝える好編だと思う。

〈佳作〉（一般の部と学齢児童生徒の部を併せた全作品より）

作品名「塗り変えられた『あたりまえ』」 高柳 美緒

コロナ禍を扱った作品だ。世の中はマスクを付けることが「あたりまえ」となり、守らないと警察や学校に通報されるという事態になった。親友の結唯の影響で本格的に漫画を描き始めた主人公菜乃花は休校になって家にこもりつきり状態ながら漫画描きに専念し、なんとか凌いでいるが、コ

ロナ禍で画一的なマスクの世界に何か恐ろしさを感じ、それが「あたりまえ」になっていることに恐ろしさと違和感を覚える。結唯とは休校が解除されても会えないでいる。担任の先生の計らいで学校の保健室に登校しているのを知り会う。結唯は漫画を描くうちにマスクをかけた顔しか描けなくなつた、何かおかしい、そして人に会うのが怖くなつたという。マスクをつける、つけないは、本来は個人の判断だが、それを主張しにくくなっている世の中に苦しみを感じる人もいることを示唆している。個人と疫病の感染防止——その選択は非常にむずかしい。この作品はその違和感を巧みに表現している佳編だと思う。

作品名「いつかカレーをよそえたら」 内田 壮

小学生佳奈は学校が違うが友だちの詩織とこの展望台のある丘でいろいろなことを話し合った。今日の話題は「ホームレス」のおじさんのことだった。昨日、佳奈はホームレスのおじさんが、佳奈の学校の6年男子生徒3人に石をおつけられているところを助けた。おじさんに礼を言われたとき、佳奈は喜びより戸惑いを感じた。過去に佳奈は彼を恐れていた事実に気づいたときから、自己嫌悪の不愉快さが消えない。翌日学校へ行くと、何か違った。佳奈がホームレスだという噂が広まっていた。佳奈はつい、「ちゃんと家に住んでいます！」と言ってしまふ。それはあのおじさんを否定することだと思ふ。詩織は佳奈が受けた「ホームレスいじり」に憤るが、佳奈のなかで詩織に話しても消えない「もやもや」をどうしたら良いのかわからない。今日も佳奈への「ホームレスいじり」は続く。そんなとき、例の3人がホームレスの家を壊しに行つたらしいという情報が入る。佳奈は怖がる詩織を誘つて様子を見に行く。現場は惨憺たるものだった。10年が経つた。佳奈は後悔していた。「ホームレスいじり」されても何も出来ず、壊された段ボールの家を見ても、無力を痛感するだけだった自分を。今、路上生活者支援の炊き出しなどの活動に参加しているが、未だに無

力のままで。また多くの人がこのことに見て見ぬ振りをしている。

あのおじさんはどうしているだろうか？ いつかこの手でカレーをよそうことが出来たらと思った。この作品はホームレスに抱く世の人の心理を巧みにあぶり出した好編だ。

作品名「灰色のラベル」 霜坂 映月

高校生の美術部員私（南美香）は、掃除当番のとき、教室で小説構想ノートを拾ったきっかけで小説を書いている同級生の長瀬君を知り、図書館で彼の小説を読んだり、私の批評を参考にごく普通の主人公の小説を仕上げたり、彼が美術部を休部している私を気遣ったりするうちに、互いに淡い恋心を抱くようになる。人は欠点がある人間っぽい方が良く、人はそれぞれ個性があり、欠点があるからこそ支え合い補い合う。それは「思いやり」や「やさしさ」に通じると長瀬君は言う。また、私には高校入学と同時に出来た友だち柴崎凜がいる。彼女は才色兼備で絵をはじめすべてにおいてかなわない私が、自信をなくしたのが休部の遠因だ。このところ長瀬君との図書館での交流にかまけてしばらく会っていない。そんなとき、凜からコンクールに出品する絵を見てほしいと連絡が入る。絵は背中合わせの二人の少女だった。凜は、絵の二人とも期待されすぎて心を苛まれた凜自身だと告白。凜が何でも出来るように見えるのは密かな「努力」によると。

人はそれぞれ違う。だから受け入れられないこともあるし、評価されないこともある。しかし、それを恐れてはいけない。好きな自分でいることが大切だと私は悟る。もう一度絵を描く意欲を取り戻し、自分に自信が持てる人間になることを夢見る。この作品は真正面からテーマを振りかざしていないが、読後にさりげなく、人を一定の枠にはめ込む恐ろしさ——個性の尊さを感じさせる秀逸な作品だ。

作品名「まつりのあと、あとのまつり」 安田 明日香

この作品は近年注目され始めた「どちらでもない性別」がテーマのようだ。

高校生の朝川は、地域の夏祭りの会場で中学のとき、吹奏楽部とともにパークシヨンパートを2年半務めた雪村鈴音に偶然遭った。雪村の浴衣でなく白いポロシャツにネクタイ、ベルトにズボンとボーイッシュな装いに、朝川は戸惑った。しかし、雪村が他の女の子のように振る舞っていたら違和感が湧き上がってきただろう。まつりのあと、横断歩道の前で朝川は隣にいる人物が雪村とはどうしても思えなかった。雪村は自分の高校の吹奏楽部の祭りのステージを観てくれたかと聞く。朝川がまとまっていた良かったと吹奏楽部の話をし出すと、今まで湿りがちだった二人の会話は急に弾んだが、自販機で互いの飲み物を買って飲んだとき、会話は途切れた。朝川は夏祭りで雪村の見慣れたスティックケースを見てから黒い霞のような疑惑がちらついていた。吹奏楽の話をする時、金賞を逃した中学最後のコンクールで雪村がドラマーとして実力と経験を必要とする朝川担当のスネアドラムを希望した。教師はじめ周囲は驚いたが、朝川はそれを雪村に譲った。部員は精魂を傾けて練習したが、結果は銀賞だった。雪村の希望は何であったのか？ 雪村の腕の力がもつと強かったら、金賞だったか……それは分からない。もし、スネアの演奏が雪村（女子？）でなく朝川（男子）だったら、と言う。朝川はどう言っても良いか分からなくなっていた。雪村の独白は続く。みんなは銀賞だったのは雪村のせいではないと言うけれど、謝りたかった。やがて雪村は、女子であることが絶対嫌いというわけでもなく、かといって絶対男子でいたいと言うほどでもない「どっちでもない性」だとカミングアウトした。この物語は未知の分野に踏み込んだ作品として評価したい。

## 《審査総評》

本年度、随想部門への応募作品は、<sup>1,273</sup>編でした。内訳は、一般の部が<sup>223</sup>編、学齡児童生徒の部が<sup>1,050</sup>編です。コロナ禍のもと、私たちは不自由な生活に耐えることを強いられています。友達に会って話す機会も制限され、外出も控え、マスクをしたり手を洗ったりなど注意を払いながら暮らしているかなければなりません。時には疲れ果て、心身共に衰えたのではないかと不安になったりもします。そのような状況下でありながら、昨年を超える応募をいただき、選者として心から有り難いと思っています。創作する心は、コロナ禍にも負けず、むしろ強靱なものになっていくような気がします。

コロナだけではなく、私たちの日常は常に困難に直面しているものではないでしょうか。けれども、それを克服しようとする気概さえ持っていれば、少しずつ前進することができるはずで

「のじぎく文芸賞」が明日へつながる力となると信じ、応募してくださった作品のひとつひとつに向かい合いたいと思います。

## 〈最優秀賞〉

作品名「人生にあってはならないこと」 わんにゃん

人は時に神を呪いたくなるような不運に見舞われることがあります。作者も大切なお嬢さんを事故で奪われます。それは突然で、理解しがたいものでした。

知らせを受けたときの様子を読み、これは体験した人でなければ表現できないものだと感じました。泣き叫ぶより先に、まずは職務を全うしなくてはと考える作者の態度にも打たれます。人は悲



しいときほど、妙に冷静になるものでしょう。そんな作者を何とかして助けようと必死になる同僚たちの行動にも胸を打たれます。どんなにひどい目に遭っても、人は人によって救われると信じていると思います。

その後、始まる苦しみの日々は、読み進むのがつらいほどです。けれども、そんな作者を支えたのが、「被害者参加制度」でした。この制度によって、被害者の家族は刑事事件に一定の形で関与できるのだそうです。被害者とその家族の人権について、深く考えさせられる作品で、「のじぎく文芸賞」の最優秀賞にふさわしいと思います。

〈優秀賞〉（一般の部）

作品名「私だからできること」 近藤 音花

「みなさんにとって普通とはなんですか」という印象的な呼びかけで始まる作品です。

作品の冒頭で、私も「普通とは何だろう」と、考え込んでしまいました。呼びかけに答ええないではいられなくなるのです。

作者は病気のため視覚を失ったといえます。それまではごく普通の毎日を過ごしていたのに、少しずつ視力が失われ、回復は難しいことを知ります。その悲しみ、絶望は、私などが簡単に想像することなどできないほど過酷なものだったでしょう。作者自身、最初は泣いて泣いて、なぜ自分が泣いているのかわからないほど泣いたといえます。

けれども、盲学校への転校が作者を変えます。自分のことをかわいそうだと思うことはないと思います。周囲にいる友達に明るい人が多く、作者の心に光を与えてくれました。自分を特殊と考えず、助けたり助けられたりする存在でいたいと決心する様子に、さわやかで、正直な作者の強さを感じました。

〈優秀賞〉（学齡兒童生徒の部）

作品名「差別のない社会へ」 山下 惇斗

脳に重い障がいのある妹を持つ作者の毎日が描かれています。旅行に行くときも、妹には吸引が必要です。看護する家族には、重い負担が生じます。時には、周囲の人に邪魔者扱いされたりします。その時に感じる家族としての悲しみは、想像をこえたものでしょう。

日常生活でも、困難さがつきまといます。人手不足のため、放課後に利用できるデイサービスも通える日は週に一度しかないといえます。こうした現実が、家族や看護する人達を疲労させ、追いつめていくものでしょう。人が人に優しくあるためには、心身共に余裕が必要であると訴えかけてきます。妹を思い、心配する作者の態度に本当の優しさを感じました。

〈佳作〉

作品名「前を向いて」 東条 幸一

62歳で無職の身の上になった作者の思いが述べられています。作者にとって、それは思いもよらないできごとでした。もともとずっと働き続けるつもりだったからです。就職活動の末、無事に再就職を果たしても、なかなか次の職場になじみません。自分なりに努力してはいるのですが、仕事が合わなかったり、上司との折り合いがつかないなどの問題が生じ、思うようにはいきません。

以前から、退職したら日本中の博物館・美術館を訪ねたいと夢みていましたが、コロナ禍のもとでは、果たすことができません。楽しみにしていただけに、それはとてもつらいことでした。夢を果たせるときはいつか来るといいたいです。そんな思いに苦しみます。

同じ思いを抱えて、焦る人は他にもたくさんいるでしょう。

けれども、今、できることをしようと決心し、作者は立ち直ろうとします。野菜を作ったり、規

則正しい毎日を送ろうと努力するのです。それが日常を取り戻すことに他ならないと気づいたからです。明けない夜はないと信じたくなる作品で、私も励まされました。

作品名「弁論大会」 齋藤 恒義

笑顔が素敵な先生に勧められ、弁論大会に出ることになった作者の体験が、臨場感溢れる筆致で描かれています。作者は内向的な性格のため、最初は、人前で話をするなど、考えただけでぞっとします。けれども、大好きな先生に「出来ないはずがない」と励まされて断り切れずに引き受けてしまいます。

必死に練習をくり返し、とうとう大会当日を迎えます。緊張のあまり、頭が真っ白な作者。読んでいる私までドキドキしてきます。選者であることも忘れて、「頑張って、落ち着いて」と、心の中で言っていました。けれども、ラストシーン、先生の笑顔がすべてを語っています。作者にとってはもちろんのこと、チャレンジを勧めた先生にも、深い意味を持つ弁論大会であったに違いありません。

作品名「傘寿の秋、わが想いは深く」 塚口 佳子

日常生活の一コマを描きながらも、そこに一生忘れられないような経験をした作者の思いが丹念に描かれています。ある日のこと、作者は、留学生試験を受けるため、会場に急ぐ中国人に、どのバスに乗ったらいいのか尋ねられます。ところが、近くに彼が乗りたいバスのコースはありません。そこで、作者はわざわざタクシーで大学まで送り届けるのです。「おもてなし」の心とはこういうことを言うのでしょうか。

そこには、見返りを求めない作者の優しさがあふれています。私もこうありたいと感じさせる作

品でした。

作品名「みじかな人にも親切を」 井奥 愛花

散髪屋さんで受けた親切について書いた作品です。混んでいたの、立って本を読んでいると、一人のおばさんが席をゆずってくれました。一緒にいた弟も席をゆずってもらいます。作者はその経験を「このお店の中で次から次へと親切が続いているんだな」と、受け取ります。そして、これからは、自分も小さな親切をしたいと望むのでした。

子どもたちが周囲から多くのことを学び、自分自身の体に取り込んでいくのだと教えられた作品となりました。

【詩部門】

審査委員 時里 二郎

《審査総評》

今回は、ごく日常的な暮らしの一コマや、挨拶などのコミュニケーションに関わるような題材の作品に優れた作品が多かった。

一方最近よく話題になってきているインターネットやSNSによる人権侵害の問題、それに女性の地位や人権にかかわること、あるいはコロナ禍で浮き彫りにされた問題など、今の時代を背景にした人権問題をテーマにしている作品がとてもし少ないことも気になった。

詩という表現の問題としては、生き生きとした言葉、強く人の心に届くような言葉が少なく、詩としての妙味に乏しい作品が多いのも気になる。具体的な個人の体験に根ざした作品に、おのずとそのような、心に響く言葉が生まれると思われるので、もっと、自分の体験に取材した作品を期待したい。

〈最優秀賞〉

作品名「雨の交差点」 後藤 益男

雨の交差点でのわずか30秒ほどのできごと。青信号が終わるまでに横断歩道を渡りきれそうにならぬおばあさんに気づき、とっさにおばあさんに寄り添って、信号待ちしているバスの運転手に頭をさげる。そしてひとことおばあさんに言葉を告げてから何事もなかったように歩いていく。この女子高生のごく自然な優しさや思いやりの気持は、おばあさんだけではなく、それを見ていた作者を含めた人々の心に「何か温かいもの」を残していること。

そして、そのことが詩になって、それを讀んだ人たちも同じように、人の優しさや思いやりの氣持ちを持つことの大切さに氣づいていくにちがいない。

出来事の丁寧な描写や、第四連と最終連の余韻の響かせ方など、詩の表現も優れている。

〈優秀賞〉（一般の部）

作品名「あなたへ」 千 春

自分の子どもがいじめにあっているのだろうか。あるいは、そのことが原因で、不登校になっているのかも知れない。深く傷つきながらも、家族には「氣にしているふりをして」いる。でも子どもが「悲鳴をあげている」のを母である作者は痛いほど分かっている。苦しんでいる子どもには、おそらく母の思いはしっかり分かっているのに、今は、心の苦しさを自分ひとりで抱え込み、心を閉ざして日々を耐え忍ぶことしかできない。

そういう子どもに対して寄り添い、母としての思いや、決して一人ではないことを、心をこめて書いているところにひかれた。この手紙が、同じような境遇の家族の親や子どもに読まれ、少しでも心を共有しあい、支え合う助けになればと願う。

〈優秀賞〉（学齡児童生徒の部）

作品名「こころ」 青木 萌結

小学校二年生の作品。

読んでいて、ほんとうにこころがほぐれてくる。明るくて、詩にリズムがあつて、その内容も、自分ひとりじゃなくて、家族や友だちがまわりにいて、お互いに支え合つて生きていると、「元氣になるパワーが」生まれてくるというように、支え合うことの大切さを訴え、楽しい時ばかりじゃな

く、「雨がふったり、かみなりがなったりする日もある」が、そうやって「ころころかわるから『ころ』ってよぶんだよ。」と明るく受け止め、それも「みんなといっしょだからだいじょうぶだよ」と呼びかける。詩としても、おしまいまで息切れすることなくしっかり書けている。

〈佳作〉

作品名「ありがとうの色」 近藤 太一

店員さんの「ありがとございます」という言葉を、私たちはなにげなくやり過ごしている。それこそマニュアル化され、機械的に言わされているだけ、と受け取っているのかもしれない。作者は、そうであっても「店員さんは機械じゃない」と言うのである。

人間同士なんだから「ありがとうっていいあうだけで」「お互いの見えない部分に／少し色が塗られる」。一人ひとりを大切にし、こころ豊かな社会をつくる小さな一歩かもしれないが、挨拶が生み出す心の色を持つことから、そのような社会は育まれていくのかもしれない。

作品名「ヘルプマーク」 高松 優子

「ヘルプマーク」とは、「義足や人工関節を使用している方、内部障害や難病の方、または、妊娠初期の方など、援助や配慮を必要としていることが外見からは分からない方」が「周囲の方に配慮を必要としていることを知らせることで、援助が得やすくなるように作成されたマーク」と県のホームページにある。

そのヘルプマークを持っている作者の体験が語られている。選者も知らなかったことで、このようなマークの普及がもっと進んでほしいと願う。

作品名「ひとの心に入る時」 長谷川 葵

社会がグローバル化されると同時に、社会の活発な営みが増えます。広域に及ぶようになったこともあって、人との付き合いも多様化し、人と接する機会もいちだんと増えてきたように思う。

それゆえに、いつそう生命や人権の尊さ、大切さが社会の基盤に据えられなければならない時代になってきた。

「偏見」についても、これまでよく掲げられてきた問題だが、改めて、心のなかを見つめなおす必要があるように思う。「偏見という名の靴をぬいで」という巧みな比喻を活かしたこの作品は、今なお、「偏見」という心のフィルターが、人の心を深く傷つけてしまう見えない障壁になっていることを改めて感じさせてくれた。



## 【創作童話部門】

審査委員 尾崎 美紀

### 《審査総評》

前代未聞のコロナ禍の中、どういった作品が書かれるのかとても興味がありました。こういう時代だからこそ、人と人との関係が重要だと、誰もが感じたに違いありませんから。

一般の部の入賞作品は、どれも現代の問題をきちんと描いた作品で個性的でした。人は一人では生きていけない、とはよく言われることですが、実際問題いじめがあつたり妬みやそしりがあつたりで、そんなにきれいごとではないはずですが、しかし、どの作品にも根底に優しさがにじみ出ている、読んでいるとほっとさせられました。童話というのは夢物語を書くのではなく、今生きている人たちに対してメッセージを送ることです。そういう意味では、今回の作品は十分にその役目を果たしていると思います。

ただ、児童の部が応募数も少なく、秀でた作品が少なかったことが残念でした。もっと身近なものとして、童話に親しんでほしいと思います。

### 〈最優秀賞〉

作品名「歩みだせば、きつと」

原口 来瞳

祐介のクラスに転向してきた健は、無口で愛想が悪く、掃除もしないで帰ってしまう嫌な奴でした。やがて学校を休んだ健の家に、プリントを届ける役目を押し付けられた祐介は、いやいや訪ねた家で「迷惑なら来なくていい」と健に言われてしまいます。心の内をのぞかれた気分で、祐介は落ち込みます。

ある日、大きな荷物をぶら下げ保育園から妹の手を引いて出てきた健と出くわします。思わず声をかけた祐介は初めて健と向き合い、お互いの誤解と健の事情を知ることになります。そして、言葉に出さないと何も分かり合えないという事を祐介は知るので。

「ヤングケアラー」という耳慣れない言葉を知ったのは最近のことです。病気の親の介護や、家の事情で兄弟の面倒をみなければならぬ子どもたちのことです。こういった大事な問題が、ここに来るまで見過ごされていたこと自体は大きな問題なのですが、この作品のように、小さな事実から小さなつながりができることを心から期待したいと思わせる作品でした。

この作品では、幼い妹が大きな役割を果たしていて、最後に彼女からもらった黄色のマーガレットの折り紙が太陽のように感じられました。16歳とは思えない筆力で、小説にでもしたいような完成度の高さでした。

〈優秀賞〉（一般の部）

作品名「赤いかさ」 阿江 美穂

子供の頃、兄弟姉妹の間での物の取り合いは日常茶飯事で、どちらかが折れないと収まらないのですが、大抵は年長者が我慢することになってしまいます。年が上だからと言って理不尽な扱いをさせられることは、幼い子供にとっては小さな傷になることがあるのです。

この作品のカズと妹のユカの間にも、目に見えないもやもやが存在しています。学校では交通安全の黄色い傘が普通なのに、赤がいいと押し切ってしまったユカ。普段、「さ」がはつきり言えなくて「しゃ」と言ってしまうユカは、みんなからかわれて以来、外ではしゃべらない子になってしまったのです。それなのに、いつもとは打って変わって「赤がいい」と言いはる妹に対して、カズはどうにも気持ちが収まりません。

ところが、男の子たちからかわれ、傘を取り上げられて橋の下に落とされたユカを見て、カズは駆けつけます。川に流されそうになった傘を拾い上げたところが、「小学生が一人で川に入っていた」という通報で先生から叱られることになってしまいます。その時、立ち上がったユカは、「かしゃ、かしゃ」と叫びながら必死に姉を擁護しました。

姉妹愛と一言で言ってしまうえない、弱者への思いやりがこの作品には溢れていて、小さな日常の中にある人としての生き方の基本を教えられました。

〈佳作〉

作品名「オリンピックのかがやきのかげで」 パク ヘレナ

予想もしなかったコロナ禍の中で、2021年東京オリンピックが開催されました。たくさんのお名場面が生まれ、人々は感動をもらいました。でも、これで良かったのだ、と手を振って言えない気持ちです。ここに潜んでいます。

この作品は、オリンピック開催のかけで住む場所を追われたホームレスの人々を取り上げた作品です。過去に行われた国々でも、その都度問題になるのが会場やその付近に住むホームレスの人たちです。主人公は、大きな大会には陽の当たる部分だけではなく陰の部分もあるという事を知って、それを自由研究の課題にします。

過去の大会や、その後のことを調べていくうちに、主人公はオリンピック憲章を再確認します。そこには、人間の尊厳を大切にするためにスポーツを役立たせること、とありました。

尊厳とは、「人間が互いを人間として大切にすること」です。いつの間にか、オリンピックは成績を上げることのみにすり替わっていることを、考えさせられた作品でした。

こういった難しい問題を取り上げ、子どもたちにやさしく解説することも童話の大きな意義です。

作品名「どじだなあ」 橘田 由加里

カメがたくさん住む池に、新人のポムが捨てられてきました。誰もが知らんぷりの中で、ハンだけがポムに声をかけてくれ、仲間にしてくれました。しかしながら、小さなことがきっかけで二人は反目してしまいます。人間の世界そっくりですね。お互いが、自分こそ正しい、相手が間違っているという理屈で、どちらも譲らないのですから。

大きな鳥や蛇など、カメの世界にも日常的に危険がいっぱいです。ハンに危機が迫って来た時、自分を投げ打ってでも助けたいと思ったポムに拍手を送りたい気持ちです。人間の世界でも、ほんの些細なことでお互いが傷つけあったりする半面、見過ごしてしまいそうな思いやりが、人の心を大きく変えることがあります。

コロナで自粛期間が長かったこの時代にあって、そんな小さな記事を新聞やネットで見つけると、まだまだ人間も捨てたもんじゃあないとうれしくなりました。

作品名「シユウくんのかざぐるま」 原 哲夫

足に障害があるシユウ君は、特別支援学校に通っています。風車が大好きなシユウ君は、お母さんの押す車いすで、風車の回る様子を見ていつも笑っています。それを二階から見ているかなちゃん、友だちがいなくて不登校になってしまい、窓からシユウ君を見て、「なんであんなに楽しいんだろう」といつも思っていました。公園でシユウ君に会ったかなちゃんは、シユウ君の笑う姿がお母さんや皆を癒していることを知ります。風車が回る様子を見て笑うシユウ君を見て、つられて大きな声で笑うかなちゃん。

笑うという事が、毎日の生活の中に一つでもあったらその人の一日は幸せなんだ、と私はいつも思っています。世の中がいくら暗くても、足元の小さな花の息吹や、風の音を聞き取ること、ふっ

と口元がほぐれたら心がぐんと軽くなります。そんなことを思い出させてくれる作品でした。みんなの傍にも、シユウくんは沢山いるはずです。



最優秀賞

《最優秀賞》

## 小説部門

ゆうやとだいき

上松 敏治

ゆうやがだいきと同じマンションに引っ越してきたのは、二人が小学校に入学する直前だった。両親と一緒に転居の挨拶に来た日は、穏やかな春の日。ちょうどその頃、すぐ傍にある有間神社の桜が、煌びやかな佇まいで、観る者に束の間の幸福を無言で提供していた。

同じ歳の男の子が居ると解り、すぐにゆうやとだいきはお互いを紹介された。照れながら自分の名前だけを呟いたのが、二人の出会いだった。しかしその日以降、ゆうやとだいき

きのかげがえのない日々が始まる。

鬼ごっこをしたり、少し離れた小川へ『探検』に行った。自然に身を隠す昆虫達を追い詰め、観察して、触れて、時には逆襲を受け、二人で逃げた。子どもにとつてとても大切な遊びの時間。時折、だいきの保育園時代の友達加わることもあったが、ゆうやとだいきだけは、ほとんど毎日一緒だった。

ゆうやがこの街にやって来て、だいきはすぐに、自分や自分の周りに居る子ども達とは違うゆうやの特徴に気づいた。吃音だった。ゆうやが言葉を発する時、多くは最初の文字を何度か続けて言う。その不自然さに、初めはだいきも笑ったり、同じように自分も言葉を重ね、馬鹿にしたように真似をしたりした。でも、ゆうやが怒ることは一度もなかった。そんな時ゆうやは決まって、少しの間言葉を発せず、優しい笑顔を浮かべ、再び遊びを続けようとした。

だいきにとつて、ゆうやの吃音が気になら

なくなり、真似すること、ましてや馬鹿にすることなどをしなくなるまでに、それほど多くの日々を費やすことはなかった。ただ、新しい友達に加わる度に、みんな最初はゆうやが絞り出す言葉に触れ、蔑むような言い方で指摘した。子ども世界の残酷な風景は何度も繰り返される。この時もまた、ゆうやはだいきにした時と同じように、少し黙って優しい笑顔を浮かべていた。だいきは何度か、ゆうやを馬鹿にする友達に強い言葉を浴びせ批難することもあった。でも、だいきが他の子を責める言葉で、子どもの国に生まれる、ある種の緊迫した雰囲気やが喜ばないことを感じ、大きく触れようとはしなくなった。

エネルギーと好奇心に溢れる二人の少年は、いつからかサツカーをすることが、一番のお気に入りとなる。マンシヨンのすぐそばにある公園には、錆びた滑り台と、たくさん子ども達を空想の世界へと揺らし続けてきた赤と青の古びたブランコがあった。その横

にあるグラウンドは広くはなかったが、少年二人がサツカーに興じるには、十分な大きさではあった。

二人は暗くなるまでボールを蹴った。青と白のカラフルなサツカーボールが、少しずつ自分の思い通りに扱える喜びが増すにつれ、お互いのサツカーへの情熱は高まり続けた。ゆうやにとって、会話の少ないこの遊びは、とても気楽で、好都合でもあった。やがて、蹴り合っていただけの二人のサツカーに、木と木の間や、お互いが脱いだ服を並べたゴールが生まれ、シュートが生まれた。他の友達も加わったが、二人のレベルはもう頭一つ抜けており、思うようにいかない友達は、ゲームの方が楽しいとその場を立ち去り、最後にはいつも二人が残った。

少子化の時代。郊外の町が子ども達で溢れかえることはない。ゆうやとだいきが通う小学校も、各学年二クラスだけ。一年生では、ゆうやとだいきは別のクラスになった。小学



校入学直後から、ゆうやの吃音は周囲の大きな関心を集める。正直な子ども達は、露骨に、また時には大人の世界を覗き見て手に入れたような陰湿な含み笑いを浮かべ、ゆうやの吃音を話題にした。

特に、朝の会や終わりの会で日番となり、みんなの前で喋る時が大変だった。「いまから朝の会を始めます」の「い」がなかなか出てこない。やっとの思いで「い」が出て、今度はその「い」を繰り返し発するだけで、なかなか「ま」にたどり着かない。多くの者が難なくできる作業に、ゆうやはいつも健気なほど一生懸命だった。

ゆうやの担任は、新卒三年目の若い女の先生。ゆうやが苦しむ光景を目の当たりにし、なんとかこの状況を打開しようと、色々取り組んでくれた。多くの言葉を話させるのではなく「はい」一言で済むように会話を操作する試みも行った。しかし、その「はい」がゆうやにとって一番の難敵でもあった。他の

人に容易に思えることが、誰にとっても当てはまるものではない。「は」の音は、力を籠めなくては発声できない音であり、ゆうやにとって、産みの苦しみが非常に大きい音だった。簡単に見える言葉すら出ない様子は、周囲が揶揄するツボとなると同時に、担任のあからさまな配慮が、まだ幼い一年生に差別意識を与え、さらに悪循環を生んだ。普段賑やかなクラスが醸し出す重苦しい場面になると、困った顔を隠せない担任のそばで、ゆうやはただ立ち竦むしかできなかった。

ゆうやの母親は、小学校で息子に起こるであろう悲劇を予想し、入学前に学校に個別の面談を行ってもらった。その際、ゆうやの吃音の特徴や性格を細かく伝え、特別な支援をお願いした。ゆうやの吃音に気づき、共に暮らしてきた今日まで、母親は息子を苦しめる特徴の原因が自分にあるという、なんの根拠もない罪悪感が頭から離れることはなかった。相談を終えて、「よろしくお願いします」

と言いながら下げた頭は、罪の意識が生み出す責任感からか、痛々しいほど深くまで下げられていた。

ゆうやとだいきは、二年生から地元のサッカークラブ《FCフィット》に入った。二人が大好きなサッカーを存分にやれる日常は、喜び以外の何ものでもない。もともと二人には高い運動能力があり、それに加えて、練習がない日も二人でボールに触れ続け、切磋琢磨の時間を重ねていくので、ゆうやとだいきの技術は、周囲を日に日に凌駕していった。

四年生が終わろうとする頃、ゆうや達は大事な試合で負けた。普段ゆうやにもよく声をかけてくれる仲間が、自分達のゴール前で空振りしたことが決勝点に繋がった。試合後の帰り道、チーム送迎バスの停車場を降りると、ゆうやはその友達に声をかけた。

「き・き・気にするな。み・み・みんな、ミスはするから」

穏やかな笑顔を浮かべるゆうやに、少し前

を俯きながら歩いていた友達は振り返り、「ちよっと上手いからって、偉そうに言うな。ちゃんと喋れないくせに」

そう吐き捨てる、仲間はゆうやを置き去りにして、走りながらその場を離れた。有間神社の前で取り残されたゆうやは、呆然とその場で立ち止まり、自分に発せられた言葉を噛み締めた。少し遅れて、後から降りて来ただいきが、ゆうやの普段と違う様子に気づき「どうしたの？」と声をかけた。ゆうやは一度目を閉じて深呼吸をした後「な・な・なものない。帰ろ」とだいきに答え、二人はいつものように歩き出した。神社の桜には、小さな蕾がいくつか見え始める頃だった。

サッカーボールを間に挟み、二人は多くの夕暮れを一緒に迎えた。オレンジのグラデーションがかかった秋の夕焼けは、本当に美しい。自然が生み出す、こんなにも素敵な芸術に包まれながら二人で歩く時も、サッカーの話がほとんどだった。だいきはたくさん外国

のサッカー選手を知っている。ゆうやもだいきに影響されて、知識がないわけではないが、ほとんどが聞き役に回る。学校の予定や宿題の話は、別れ際の確認程度だった。

その日は偶然、散歩中のだいきの祖父が家の近くで合流し、ゆうやの吃音を耳にした。二人の少し後を歩き、だいきの家に寄った祖父は、だいきにゆうやの話が聞きづらくないかを尋ねた。だいきは不思議そうな顔をして、もうずっと一緒に、慣れていいるから全く気にならないと平然と答えた。母親が出したお茶を飲みながら、祖父は安堵したような表情を浮かべ、我が孫が誇らしく思えた。

ゆうやとだいきを結ぶ線上には、いつもサッカーがあり、その周りをたくさんの友達が行き来する。学年が進むにつれ、二人が包まれる人間の輪も徐々に大きくなり、様々な経験がそれぞれを成長させていった。そして、無邪気に過ごす小学校での日々はあまりにも早く、幼さに包まれた少年達は、いつの

まにか大きくなり、口にする言葉も、発する声も変わっていった。それでも、ゆうやとだいきは変わるところか、日々友情を深めながら六年生になった。しかし、当たり前のように続くと思われた日々は、そうならないことの方が多い。子どもには抵抗のできない理由で、自分の人生が大きく揺さぶられることが、時として訪れてしまう。

梅雨が終わりに近づくある日、だいきの母親は、ママ友からの情報で、ゆうやの九州への転校を知った。慌ててゆうやの母親に確認すると、本当に申し訳なかったと何度も謝られた。ゆうやが言わないで欲しいというので、いつ言えば良いのかと悩んでいたそう。PTA関係で一部の母にだけ話をしていたらしい。父親の仕事が熊本の工場勤務となり、家族揃って夏の終わりに引っ越すことが決まっていた。だいきの母親が、だいきに話しているか確かめると「お願いします」と懇願するように、それ以上に申し訳なさそうに答

えた。いつも優しく、物腰の低いゆうやの母親が、電話の向こうで頭を下げている姿が、だいきの母親には目に浮かぶようだった。

だいきの母親は、父にラインで帰る時間を確かめた。三人での夕食を終え、だいきに話があると伝えて、もう一度食卓に座らせた。だいきの横に母親が居て、斜め前に父親が居る。いつものポジションだった。普段陽気な父も、少し雰囲気が違う。そして今から口を開こうと準備する母親の顔は、子どもの目から見ても明らかに緊張があった。この場所では感じたことの無い重苦しい雰囲気包まれ、落ち着かない気持ちでだいきが母親を見つめると、意を決した母親が口を開いた。

「だいき、ゆうや君、この夏休みの終わりに転校するんだって」

母親の言葉を耳にしたいだいきの目が、一瞬きつく見開いたのを、前から見つめていた父親は見逃さなかった。母親が言葉を続ける。

「お父さんのお仕事の関係で、熊本に引っ越

すんだって。今日ゆうや君のお母さんに教えてもらったの」

だいきは何も言わなかった。突然すぎたのかも知れない。怒るでもなく、泣くでもなく、取り乱すこともなく、少しの間その場でじっとしてから顔を上げて、

「それなら仕方ない」

そう一言呟いた。子どもなりの諦めも、悲しみも、遣る瀬無さも詰まった言葉だったことは、両親には痛いほどよくわかった。それと同時に、向かい合って目を合わせた父と母は、我が子の知らぬ間の成長を強く感じた。

翌日の練習で、夏休みにある一番大きな大会の組み合わせが監督から発表された。最大のライバルであり、直前の大会で敗れた新神戸FCとは決勝まで当たらない。とにかく勝ち続けようとチームはグラウンドで誓った。

普段と同じように汗を流し、同じように肩を並べて帰る道。でも、この日はいつもと同じ別れではなかった。二人が住むマンション

が見える場所に來た時、だいきからゆうやに転校の眞実を確かめた。ゆうやは氣まずそうに、それでいてどこか、今日この話になることを覚悟していたように、「言つても言わなくても転校することが変わらないのなら、言うのが怖くて言いたくなかった」そう正直にだいきに話してくれた。いつも以上に、言葉は途切れ途切れだった。「離れるのは寂しい」と言い、最後に小さな声で「ごめん」と付け加えた。「謝る必要なんかないよ」とだいきが語尾を強めるように言うと、それ以上の会話は続かなかつた。西に連なる山の少し上から、絵画のごとく美しい夕焼けが、二人の水色の練習着と、イニエスタと書かれただいきのリストバンドを明るく照らしていた。

ゆうやの母親は、テレビで専門家がしたり顔を浮かべながら、『吃音とは安心感があれば治る』と断言するように言うのを聞いた。この話題になると、吃音に直面する家族の多くは、希望よりも怒りを感じるとよく言われ

る。確かに、そんな簡単なものだとはい、どうしても家族には思えなかつた。『治る』という縛り付きたくなるような言葉を簡単に使うのは、とても罪なことにも思えた。ただ、ゆうやがだいき君と話す姿を遠目に眺めている時だけは、その言葉がまんざら嘘ではないと感じられることもあつた。

引越しを知つた数日後、子ども達が学校に行つている間に、だいきの母親がゆうやの家を訪れ、二人でお茶をした。ワイルドストロベリーのきれいなティーカップを前に、二人は話し込んだ。普段は聞き役になることが多いゆうやの母親が、この日は語り手だつた。「いつもゆうやのことありがとうございます。だいき君が居て本当に良かった」と繰り返して感謝を伝え、ティーカップの模様を両手で包み込むようにしながら、ゆうやの母親は伏し目がちに、ある日の出来事を告白した。

「一度だけ『ゆう君は、自分の吃音どう思つてる』って聞いたことがあるんです。あの子

はすぐには何も答えず、いつものように笑って『だいじょうぶ』って言ったんです。『平気』でも『嫌だ』でもなく、『だいじょうぶ』って。解ってはいたけれど、改めて残酷な質問をしたんだと思つて、とても自分が恥ずかしくなりました」

我が子の幼い頃からを遡るように、母親は吃音の特性と、周囲に起こる現象、息子や家族が経験した様々な辛かった思い出を語った。ひとくちに吃音と言つても色々なタイプがあると言ふ。「あ、あ、あ」と繰り返し返す連発。「わーたしは」と伸ばす伸発。話し出すのに時間がかかる難発。日本では約百二十万人の人が吃音で苦しんでいると言われるが、はっきりした原因は解っていない。吃音とはただ現象を指すのではなく、話すのが怖い人のことだという人までいることも教えてくれた。

言葉が上手く出ず、結局音が出ない時は、『沈黙』と理解され、そうではないと本人がいくら思つても「こいつ、喋らない」と罵声が

飛んでくることはよくある話らしい。吃音者の「もう少し待つて」の声は、時間に急かされ続ける今の世の中では、容易に受け入れられないことが多い。吃音は子どもから大人まで、いじめられる人生に直結していく。メディアで取り上げられなくても、それが苦で自殺する人も絶えないのが現状だとも言われる。耳を塞ぎたくなくなるような情報も、吃音を持つ家族には否応なく届いてくるそう。

「吃音者は幾つになつても、たとえ一日でも普通に話したいと夢見るそうです」

我が子が抱く思いを代弁するかのよう語るゆうやの母親を見てみると、だいきの母親は涙を堪えることができなかつた。

「以前と最近では、私もだいぶ考え方が変わってきました。今は、ゆうやの吃音が一生治らなくても、あの子が幸せに生きてくれることを望んでいます。そう思わせてくれたのは、だいき君の存在が大きいのだと思います。だから本当に感謝しています」

ここまで話して、ゆうやの母親が笑顔を浮かべながら頭を下げた時、それとは対照的に、だいきの母親の大きな瞳から溢れる涙は、止まる時が来ないのではと思わせるほどに零れ落ち続けていた。

望んでも望まなくても、時は待つことはない。ゆうやとだいきにとつての最後の大会は、多くの真剣勝負がそうであるように、ここに関わる人の様々な思いを背負い始まった。

Bブロック。優勝候補と目されるFCフィットは、一回戦二回戦で地元の小学校チームを大差で撃破。三回戦で思わぬ苦戦を強いられるも逆転で勝利。準々決勝は二対〇というスコアながら、危なげなく勝利を収める。Aブロックも予想通り新神戸FCが勝ち上がり、準決勝へ駒を進めていた。

準決勝と決勝は同じ日に行われる。ゆうやとだいきは、それぞれの家が車を出しながら、二人してゆうやの父が運転する車の後部座席

に並んで座っていた。いつもより緊張した面持ちの二人は、車の中でもほとんど言葉を交わさず、会場に到着してからも、肩を並べ黙って集合場所へと向かう。背中より大きいリュックと、あと少しの期間しか蹴ることのない四号球をそれぞれが持つ。二人の後姿を見守りながら、四人の親は微笑ましく、それでいて、今日という日が過ぎゆくのがとても惜しいような想いを重ねていた。

準決勝第一試合に登場したのは新神戸FC。個々の能力が高く、チームとしてもまとまっている。ユースチームを持ち、卒業後兵庫県の高校サッカーを牽引して行く選手も多い。

第一試合が始まった。前半は〇対〇で終了。しかし後半になると、地力に勝る新神戸FCが徐々にボールを支配し、ショートパスをつないだ美しい崩しからゴールが生まれる。試合はそのまま終わった。新神戸FCに実力で勝てるのはフィットしかない。事情に

通じている関係者は、みなそう思った。

準決勝第二試合。フィットの相手は、町田少年団。伝統のある名門チームだ。フィットは、ゆうや・だいき・かけるのセンターライオンを軸に、2・3・2のシステムで後ろからボールをつなぐ。だいきのアイディアと、かけるの決定力が最大の武器だ。G K 颯太。S B がゆうやとたくみ。中盤は中央にだいきが居て、右にきょうご左にまさひろ。FWはかけるとスピード自慢の英治朗。試合前の円陣が解け、それぞれのポジションに散らばろうとする時、ゆうやがだいきに声を掛けた。

「だ・だ・だいき。がんばろう」

ゆうやが「だいき」という名前を呼ぶ時に詰まることなどほとんどなかった。二人の緊張感がより高まる中、だいきは「うん」とだけ返事をして、センターマークに置かれたボールを見つめた。

試合開始直後からボールを支配するのはフィット。しかし、ボールサイドに人数を置

いた守備に苦戦し、カウンターから一瞬のスキを突かれ先制点を許す。失点の前から、もう一人のセンターバックたくみが上がり過ぎていることに気づきながらも、ゆうやはうまく注意できなかつた。前半は○対一で終了。

ハーフタイムに監督が、いつもより強い口調でチームに喝を入れる。「お前達はここで終わるのか?」「最後に新神戸FCとやらなくともいいのか?」「若い指揮官の情熱は、下を向いてベンチに座っていた子ども達に勇気と闘志を与えた。相手よりも先にグラウンドに飛び出し、円陣を組みキャプテンかけるの「絶対勝とう」の一言に、みんなの「オー」と言う雄たけびが重なる。意気上がるメンバーの中で、ゆうやは空を見上げ思った。この場所には言葉はいらぬ。この場所では言葉を怖れることはない。サッカーを全力でやればそれでいいんだ。最高の場所だ。ピッチに向けられたゆうやの目には、自信が漲っていた。

後半開始から猛攻を仕掛けるフィット。少



年少女が繰り広げるスポーツにおいて、気持ちの波が繰り出す力は大きい。相手の勢いを感じる町田の選手は、だいきとかけなが繰り出すワンツーを止めることはできず、だいきの放った見事なシュートが決まり追いついた。だいきは仲間にもみくちやにされた。かけるがボールを持ち「もう一点」と声を上げながらみんな自陣に戻る。そんな中、最後にだいきに近づいたゆうやは「ナイスシュート」と声を掛けた。だいきも右手でガッツポーズを作り、ゆうやだけに喜びを伝えた。二人の友情が、夏の空の下で輝いた。

その後も攻め続けるフィット。今度はコーナーキックからかけるが鮮やかなシュートを決め二対一と逆転。かけるのもとに集まる歓喜の輪の中で、勝利を信じたゆうやとだいきの笑顔が弾けていた。グラウンドを囲むフェンス沿いでは、ゆうやとだいきの母親が、手を取り合い跳ねるようにして喜びを分かち合った。そのすぐ隣では、試合を見守る新神戸F

Cの選手から笑顔が消え、すでにライバルとの戦闘モードに入っていた。

しかしゲームの流れは、同じ方向にばかり進まない。「最後まで諦めるな」今度は相手監督がグラウンドにぶつけた一言で、町田の選手は顔を上げ、球際の粘りが増した。守る気持ちだがどこかに芽生えたのか、知らず知らずにならずつ劣勢になるフィット。デイフェンスにいた町田のキャプテンが、攻撃参加して何回か好機を生む。そして試合終了一分前。キャプテンのシュートがバーに当たった跳ね返りを、詰めていた小柄なフォワードが決めて同点。フィットの選手が呆然とする中、試合はそのまま終了のホイッスルが鳴り、PK戦となった。

監督のもとに集まり、ゆうやは三番手、だいきは五番手のキッカーを告げられた。笑顔のないチームの輪が解けた時、今までの二人の繋がりが自然とそうさせるのか、知らず知らずにゆうやとだいきは肩を並べ、センター

サークルへと向かった。

先攻は町田。一人目のキックが決まる。フィットの一人目はかける。迷いなく振りぬいた右足から強いシュートがキーパーの右側を破りガッツポーズ。町田二人目のキッカーも落ち着いて決めた。フィット二人目は右サイドのきょうご。普段は陽気だが、ボールをセツトする手にも緊張が感じられた。それでも、キックはキーパーの逆を突きゴール。町田三人目のキッカーが放ったシュートは、ゴールキーパー颯太の手に触れたがゴールへ。颯太は悔しそうに歯を食いしばった。

フィット三人目はゆうや。町田のシュートがゴールに入ったのを見ると、ゆうやはゆっくり立ち上がって、座って順番を待たないき目をやった。強張った顔の二人は、お互い小さく頷く。そこに言葉はない。ボールまで小走りで行き、ゆうやはしつかりと両手でボールをセツトする。公園で見えないゴールを二人で作る、何度もPKの真似をして遊ん

できた。そんなだいきとの時間を頭の片隅に思い浮かべ、ゆうやは審判の笛を待つ。迷いはない。審判の笛と同時に助走に入ったゆうやのシュートは、強い弾道でGK右のサイドネットに刺さった。緊張から解き放たれ、ホツとしたゆうやには、フェンスの奥で胸の前で手を組む母と、その横で小さく拍手する父の姿が見えた。

町田四人目のキッカーは、長い助走から左右に体を揺らすプロさながらの身のこなしで、強いキックをゴール右隅に決めた。フィットの四人目はまさひろ。普段から飄々とした性格のまさひろは、慌てた様子もなく審判が置いてくれたボールを確認し、改めて触れることもなく数歩後ろに下がり、審判の笛と同時にスタートを切った。左足から放たれたボールはGKの右側に綺麗に決まった。ひとつひとつのゴールが決まる度に、観客からの声援が増していくのが、緊張が頂点になるうとしていただいきにさえわかった。町田

五人目が蹴ったボールは、ゴールのバーを叩く音を響かす。敵も味方も含めた多くの人間が、その一瞬に様々な思いを描いたが、そのボールは幸運に後押しされ、ネットに向かい進んで行った。右手で胸を押さえながら仲間のもとに帰るキッカーを、町田のメンバーが笑顔と冷やかしの声で迎える。

フィットの五人目はだいき。町田応援団の拍手がやまないうちに、だいきは立ち上がった。フィットのこの学年は、だいきの技術に支えられて強豪でいられたことをみんな解っている。G Kの颯太は、一人も止められていない悔しさが顔に滲み出ていた。だいきの横に座り、まだ蹴っていない二人のチームメイトには、焦りの表情が見てとれた。全ての仲間から『任せたぞ』という強い思いが一直線にだいきに迫ってきた。

前へ進もうとする直前、ゆうやの顔が見えた。いつもと同じ穏やかな優しい顔で『信じている』と言っているようにだいきには思え

た。G Kを鼓舞する相手監督の太く低い声が響く。「はい」と大きな声で返事をしたG Kは、胸の前でキーパーグローブを大きく二度叩き合わせ、気合を入れた視線をだいきに送る。ボールの傍まで来て、だいきは体を屈め、両手でボールを抱え、少し浮かしておでこに付けた。研ぎ澄まされた五感。冷たい感覚がおでこを拠点にして全身に伝わる。ボールをゆっくり置き、顔を上げた。目の前にいるG Kがもう一度気合を込めた声を出す。だいきは無心だった。緊張で何も考える余地がなかったという方が正しいのかもしれない。五人ずつのP K。九人の選手が決めた後に挑まなければいけないキッカーは、一番残酷な難業を託されることになる。しつかりと気持ちをおろち着ける時間を与えられることなく、審判のキックを要求する笛が響く。だいきには急かされる轟音のように聞こえた。

スタートを切った。感覚でしかない。今まで何千回、何万回と蹴ってきたボールに向か

う。ゆうやと繰り返した二人のパスは、二人が交わした会話より何倍も多かった。そして二人は、多くを解り合ってきた。インサイドでキーパーの左。右のサイドネット少し内を狙う。頭の中にインプットされた命令に従い、だいきは右足を振りぬいた。強いボールは狙った場所を目掛けて伸びていく。キックの一瞬後にボールを追いかけたGKの身体が左に傾いた、追いつかない。しかしボールは、勢いよくポストに当たり、倒れたGKの前を横切った。そこに居る全ての人から音が消えた。田園と駐車場に周囲を囲まれたコートを一瞬静寂が支配する。そして、この場所を正常な空間に引き戻すかのように、審判の長い笛が鳴り、様々な音が一齐に沸き上がった。

だいきはその場に立ち尽くした。次に動く場所が解らない幼子のように。ハーフライン上に、規律正しく並んで座っていたフィットから、ゆうやがいち早く立ち上がり、だいきの方に向かった。歩き出した息子の後姿を、

ゆうやの両親はじっと見守っていた。だいきの母親は声を上げて泣き始め、横に居た父親は、責めるはずもない仲間の親達に頭を下げ謝り続けた。だいきのもとにたどり着いたゆうやは、「だいき」とだけ声を掛け、肩に手を回して方角と感覚を失った親友をセンターサークルの方向に導いた。かけるをはじめ、何人かの仲間もだいきに駆け寄り、銘々に慰めの言葉を掛けた。ただ、この日のすべてが終わるまで、だいきはチームの中で何も喋らなかつた。

その日の夜、言葉のない夕食を終え自分の部屋に戻ろうとするだいきが、台所でひとり片付けをする母親に呟いた。

「サッカーなんかやらなきゃよかった」

いつもより小さく見える息子の横顔に、母は怒るでもなく、諭すでもなく言葉を掛けた。「本当にそう思ってるの。だいきは、ゴールや勝ち負けのためだけにサッカーをやったの？ もしそうだったとしても、あなたは

知らないうちに、サッカーを通して色々なものを身につけているのよ。その一番がゆうや君じゃないの。この前ゆうや君のお母さんが、ゆうや君がだいきと出会えたことにとても感謝してた。あなたもずっとゆうや君と一緒に居る中で、たくさんのことを学んできた。

ゆうや君の振る舞いに、どんな人が本当に強いかを教えてもらったはずよ、違う？ サッカーがあつたからこそ、二人は本当の友達を見つけられて、成長できたんじゃないの」

母親の話を立ち止まって聞きながら、だいきはゆうやとの色んな場面を思い出した。

「ゆうや君が、あなたに無い苦しみを背負っていることも、傍に居るあなたは、一番解っているでしょ。そのことを知っていて、感じてきたからこそ、他人に優しくなれる心をもたえたんじゃない」

母親の言葉が一通り終わると、少し間をおいて、だいきは呟くように言った

「ゆうやの吃音も、いつか治るといいね」

「どうかな。治すものじゃないかもしれないし、治らなくても苦しむことの無い世の中になるのが、一番良いんだらうけどね」

母の言葉を自分の中で一生懸命噛み砕きながら、その言葉が意味する世界を想像した。

「そうだね」

だいきは母親の顔を見つめ答えた。

引越しの前日、ゆうやはだいきに会いに来た。何の取り決めもなかったのに、二人はいつもの公園に向かった。当たり前のようにだいきは四号球を左腕に抱えていた。最後のPKを外し、決勝に行けなかったことを、だいきは初めて他の誰かに謝った。ゆうやはいつもと同じ、いや、いつもより穏やかな笑顔を浮かべながら、首を横に振った。

ゆうやは優しく強い男だ。だいきはずっとそう思ってきたが、不意に先日の母の言葉が思い出され、ゆうやの強さの根元には、たくさんの苦しみがあることが想像できた。

「ま・ま・また、ど・ど・どこかで、い・いっ

しよに、サッカーできたらいいね」

ゆうやの瞳は、いつも羨ましいくらい輝いている。自分もこんな瞳でいたいと思った。

「もし敵なら、負けない」

だいきが真剣な表情で言うと、

「も・もちろん、ぼ・ぼくも」

ゆうやが答えた。どこかぎこちない笑顔を浮かべた二人の間には、その後すぐ、四号球が行き来するための距離が開かれていった。

(注) 四号球：サッカーで、小学生の大会で使用するボール



《最優秀賞》

随想部門

人生にあつてはならないこと

わんにゃん

四年近く前の十月十二日、午前。

私は、小学六年生の子どもたちと一緒に、バスに乗って、広島へ修学旅行に向かっていた。バスの中では、歌を歌ったり、クイズを出したり、子どもたちと一緒に、バスレクをして楽しんでいた。そんなときである。一人の職員が、

「校長先生。教頭先生から、校長先生に電話がありました。すぐに、奥様に連絡を取ってほしいとのことですよ」

いつものことながら、私の携帯電話は、役

に立たない。携帯を見ると、確かに、教頭先生からの着信履歴が残っていた。こんな時に何だろう。学校で何かよほどのことが起きたのかもしれない。いや、それなら、学校に連絡しろというはずだ。何があつたのだろう、という気持ちで、妻に電話をかけた。

「娘が亡くなった」

一瞬、妻が何を言っているのかわからなかった。一番考えられない言葉であつた。

「嘘やろ」

思わず発した言葉だつた。しかし、妻のその言葉に変更はなかつた。頭の中は、真っ白だつた。しかし、耳で聞いた言葉だけでは、信じられないという考えと、受け入れられないという思いが交錯した。その言葉は、脳には届いたが、心には届いていなかった。その上、今は、最高責任者の校長として、修学旅行を引率している。私が今、離脱するわけにはいかない。

バスがパーキングエリアに入り、トイレ休

憩となった時、私は学校に連絡を入れた。

「私は、このまま修学旅行に行く。そして、明日、子どもたちと一緒に、神戸に戻る」と。迷いはなかった。

すると、教頭先生が、言った。

「校長先生は、神戸に戻ってきてください。私が代わりに、広島に行きます」

その言葉を聞いて、思いに迷いはなかったはずだったが、なぜか私は、胸につかえていたものがすつと取れたように感じた。

「よし、神戸に帰ろう。娘に会いに行こう」

そんな思いが沸き起こった。

その後、随分時間が長く感じられたが、やっとの思いで、神戸の病院にたどり着くことができた。

その日のうちに神戸に帰ることができたのは、教頭先生をはじめ、教職員の協力、教育委員会の助力、児童、保護者の理解があったればこそだと思った。何もない、平時には、なかなかわかりにくいことであるが、こうい

う事態になった時、周りの人々のありがたさを感じることがある。今回は、思わぬ事態に直面したが、周りの人のやさしさ、思いやりに感謝という言葉では言い足りないぐらいの思いが募った。自分も、もし何かあれば、他の人のために自分の力を発揮できる人間になりたいと、常々思ってはきたが、今回のことで、より一層強く心に誓うことができた。

到着後、病院の中の小さな部屋に入ると、中央にベッドが一つだけあった。まだ信じられないという思いで、目の前のベッドの上にあった袋のチャックを開けてみた。そこには、まぎれもない、眠っているような娘の顔があった。涙と、「悲しみ」という言葉では言い表せられないような思いが襲ってきた。

ここでも、私が到着するまでの間、残された家族や娘の遺体の周りには、絶えず誰かの存在があったという。ありがたいことと感じた。



それから、事務的な手続きや葬儀の手配等々で、何をしているのかわからない感じで、時間が過ぎていった。いろいろな人との出会いがあった。

そんな中、刑事裁判が始まった。当たり前のことだが、初めてのことはかりで、不安と緊張でいっぱいだった。その時、私たち家族の心の支えになってくださったのは、「ひょうご被害者支援センター」の方々だった。支援センターの方々との出会いは、今から考えても、大変重要であったと思う。精神的な心の支えであったのはもちろんのこと、裁判において「被害者参加制度」というものがあることを教えてくださり、さらに、裁判の度に、付き添ってくださった。まさに、右も左もわからないで、不安いっぱいの子どもと一緒にいる、心強く、温かい保護者のような存在だった。

裁判が始まった。私は、「被害者参加人」として、被害者支援センターの方々、弁護士さ

んと一緒に、法廷に立った。ただ黙って聞くだけでなく、質問したり、自分たちの思いを論告したりすることができた。初めてのことばかりだったので、何もかも全くわからなかった。裁判中は、ただただ緊張の連続だった。そして、裁判で、一つ一つの事実を確認するたびに、娘の事故を目の当たりにしたような恐ろしい感覚になっていったのを覚えている。

被告人側は、自分たちに有利な判決となるように、私たちからすれば、好き勝手なことを言っているだけのように感じた。最近ではよく聞くところの、アクセルを踏んだか、踏んでいないかという論議。しかし、ブレーキを踏んでいれば、死に至るような事故になるわけはなく、その上、防犯カメラにも、車の動き、タイヤの動きがはっきりと映っているのである。もし、今、この制度ができていなければ、どんな裁判になっていたのだろうか、背筋がぞっとした。のちの裁判でも、本

当に嫌な思いをした。遺族として、裁判に出席するということは、本当につらいということがよく分かった。

だが、つらく、悲しいことばかりではなかった。支援センターの方々、折に触れ、細かく私たち遺族の思いに寄り添ってくださり、その心遣いがうれしく、裁判で冷え切った私たちの心が、じんわりと暖かく感じられるようになっていったことを覚えている。

そして、これまで、被告人の人權ばかりに配慮されていると感じられた裁判も、「被害者参加制度」ができたおかげで、弱小の立場の私たちにも、裁判に参加することができるという権利が与えられたことを嬉しく思う。ほんの少しではあるが、同じ弱小の立場の人たちにも、一筋の光が当てられるような社会になりつつあるのかもしれない。本当の意味での道のりは、まだまだ遠いと思うのだが。



《最優秀賞》

詩部門

雨の交差点

後藤  
益男

スーパー前で信号待ちをしていた  
右手に傘、左手に買い物袋、背中に荷物  
早く変われと思っていると  
斜めの青信号が点滅し始めた

横断歩道の真ん中あたりで  
背中を丸め手押し車を押している  
おばあさんが眼に入った  
傘を差しているけど半分濡れている  
間に合わないぞと思いついて見ていると  
女子高生が向き直し

おばあさんに寄り添って歩き出した  
バスの運転手に頭を下げながら  
バイクを手で制しながら

青信号が終わる

もう少して渡りきろうとしていた時

何台か後ろの車がクラクションを鳴らす

女子高生はまたバスの運転手に頭を下げた

無事渡り切ったあとおばあさんに

何か言って歩道を歩いて行った

もう何事もなかったように

もちろん他人だろう

30秒に満たない行為を何人が見ただろう

僕の傘にも おばあさんの傘にも

女子高生の傘にも雨は降り続く

バスは停留所で乗客を降ろす

僕は家路につく

それぞれ 人の時間の流れは違うけれど  
流れの違う人達が交差し合えれば  
何か温かいものが 発生するのだろうか  
女子高生の自然なおこない  
傘を握る手と背中が熱くなる



《最優秀賞》

## 創作童話部門

歩みだせば、きつと

原口

来瞳くるみ

花曇りではっとしない始業式。祐介の四年一組に転校生がやって来た。背が祐介の頭一つ分高くて、少し大人びた顔立ちの男の子だった。短くなったズボンから膝小僧が見え隠れしている。

「鈴下健です」

どこから引越してきたのか、好きな食べ物は何か、そういったことは一切言わず、健はさっさと席に着いてしまった。

（何か変なやつ）

祐介は健の後ろ姿を見ながら思った。学校

生活が始まってからも、健の無口でクールなキャラは相変わらずだった。あと一年間はいるクラスなのだから、ちょっとくらい愛想よくしたらいいのに。そう思ったのは祐介だけではなかったらしい。

「あの転校生何なんだよ、ムカつく」

始業式からしばらく過ぎた頃。放課後の男子トイレで祐介が手を洗っていると、友達の信也が大声で言った。

「あいつ、掃除はやらずにさっさと帰るし。

俺が昼休みにサッカー誘っても、すっげーぶっくらぼうに断ったし。マジ迷惑」

信也はそうとう怒っている。クラス委員長として転校生がクラスに馴染めるように、先生に色々頼まれていたのかもしれない。

「祐介もそう思うよな」

「えっ」

突然話を振られ、祐介は困惑した。確かに健はちょっと愛想が悪いかもしれない。でも一度、商店街で買い物袋を提げておつかいを

している健を見た。あの姿はどうも嫌なやつには見えなかった。それに迷惑ってほどでは……。

「な？　そう思うよな？」

信也は覗き込むようにして祐介を見てきた。信也はクラスでもリーダー格だ。逆らうと、これから一年どうなるか分からない。

「う、うん。まあ、そうだな」

だよなー！　信也は共感してくれる人がいたからか、飛び上がって喜んだ。祐介は心にわだかまりがうまれるのを感じた。

五月に入ってすぐ、健が学校を休みだした。先生は風邪だと言って、それ以上何も言わなかった。そんな日が続いた金曜日、信也が「頼む」と手を合わせて頼みこんできた。

「先生にさ、鈴下の家を溜まったプリント渡しに行けって言われたんだ。でも家反対方向だし、俺今日塾でさ。俺の代わりに持って行ってくれない？」

この通りだから！　と信也は頭まで下げた。祐介も家に帰ってからやりたいゲームがあったのだが、渋々引き受けた。「サンキュー！」と言って信也は颯爽と教室を出ていった。

健の家は町はずれのアパートだった。白い壁と四角形の窓がどこまでも続く構造のせいで、祐介はあやうく迷いかけた。おまけにカラスがひっきりなしに鳴くから、何だか責められているみたいで、一刻も早く帰りたいかった。

鈴下の家を見つけてチャイムを鳴らしたが出て来ない。風邪って言ってたもんな、と祐介が郵便受けに手紙を入れようとした。すると、ガチャリと扉が開き「なに」と健が出てきた。長い間学校に来なかったわりには随分元気そうだ。

「あ、鈴下。これ先生に……」

祐介が言い終わらないうちに、健は手紙をガサッと奪い取った。そして何かに急かされるように、そのまま家の中に入ろうとした。

せつかく人がわざわざ持ってきたのに。ムカっとした祐介が「おい」と声を出した。健が面倒くさそうに振り向く。

「……なに」

「なに、じゃなくて、お礼ぐらい一言」

言ったらどうなんだ、と祐介が言いかけたときだった。うわーん！ という女の子の金切り声が聞こえてきた。健の顔が青ざめた。健が家に入ろうとした瞬間、ぼそっと祐介の方を向いて言った。

「もう来なくていいから」

「はあ？」

「迷惑なら、わざわざやらなくていい」

ガタンと扉を閉める大きな音が、廊下に響き渡った。

(迷惑って……まさか)

信也とトイレで話した内容を、健は聞いていたのかもしれない。祐介は身体中からサツと血の気が引くのを感じ、その場から動けなかった。

翌週から健は何事もなかったように登校しだした。もちろん祐介にも声はかけず、ずっと一人で本を読んだり、宿題をやったりしている。

(これって謝ったほうがいいよな)

祐介はそう思いつつも、なかなか行動に移せないでいた。もちろん自分が陰で悪口に乗ってしまったのは悪いと分かっている。でも、健のどこか人を拒むような雰囲気はどうしても気になった。

ある日のこと。近所のコンビニから帰っている途中、祐介は保育園から出てくる健を見た。通り過ぎようかと思ったが、すぐにあることに気づいた。健の右手には女の子の手が握られていたのだ。きつと妹さんだ。しかも左手にはパンパンに膨らんだ買い物袋。祐介はあれこれ考えるよりも先に行動に出た。

「鈴下！ ちょっと待て！」

健はぎょっとびつくりして祐介を見た。が、すぐに眉間にしわを寄せた。

「急に呼んで、何か用？」

「バッグ貸して。持つから」

「いいって別に」

「危ないだろ。お前がよろけて妹さんがけがしたら、どうするんだ」

健はぐつと言葉に詰まった。しばらく考えこんでから、すつと祐介にバッグを差し出した。持つとずつしり重い。いつもこんな重たいものを持ちながら、妹の送り迎えをしているのだろうか。それからどちらともなく健の家に向かって歩き始めた。妹は初めて見る祐介に少し緊張しているようだ。もじもじしながら健の右手を握っている。

「鈴下がこんな大変なんて、知らなかった」

「言っていないからな」

道路を見て車が来ていないか確認しながら健は言った。やっぱり健は悪いやつではないはずだ。びっくりするくらい不器用なだけだ。

「少しはクラスメイトに言ったらいいじゃ

ん。掃除ができないわけとかさ。みんな鈴下のこと良く思っていない。誤解されたままで」

「妹が熱出したから休みます、なんて言ったらみんな何て言う？ 送り迎えあるから早く帰らないといけない、なんていう言い訳は通用しないだろ。なら別に言わなくていい」

健はいつもはぐらかそうとする。祐介はそのことに腹が立った。このままじゃ健はずつと孤立してしまう。いいところがあるのに誤解され続ける。

「……伝える努力をしていないのに、逃げるなんてひきょうだ」

ちょうど信号に引っかかった。健は祐介をじつと睨みつける。祐介と健の間に挟まれた妹は、キョロキョロと交互に二人の顔を見ている。どこか不安げな様子だ。

「ひきょうってなんだよ」

「そうやって人を遠ざけるところ」

「こっちは三人暮らしで大変なんだ。さつきから自分勝手に……！」



「でも！」

祐介はぎゅっと拳を握りしめた。手の指が白くなるくらいに。

「僕も鈴下のこと、知ろうとしなかった」

友だちがそう言うから、周りがそうするから。祐介はそれを言い訳にして、自分からは関わりようとしなかった。鈴下が何か言いたげに口を開いてから、前を向いて「青」とつぶやいた。信号はいつの間にか青になっていた。

「だから、これでおあいこ」

祐介の最後の言葉は、子どものケンカみたいな一言になってしまった。何も言わないままの健を見て、ますます怒らせてしまったかもしれないと祐介は気落ちした。すると不意にシャツの袖を引つ張られた。健の妹が祐介を見上げている。

「あんな、お兄ちゃんいっつもこうやねん。こまったらだまるところ。気にせんといena」

おい、バカ何言ってるんだよと健はあたふた

しだした。そんな健の意外な姿に祐介は我慢できず、ついに吹き出した。おしゃまな妹のフォローにも笑いが止まらない。健の顔が真っ赤になっっているのは、夕日のせいだけではなさそうだ。祐介は今ならあの言葉を言えそうな気がした。

「ごめん。前に鈴下のこと悪く言ってる」

健は視線を泳がしてから、消え入りそうな声で「俺もごめん」と謝った。

「明日から信也ぐらいには言えよ。何だかんだ言って委員長だから、分かってるはずだし」

「うん。たぶん」

たぶんって。そうこう言っているうちに健のアパートに着いた。荷物を健に渡して帰ろうとしたとき、健の妹が「まって」と祐介を引き留めた。カバンから何かを取りだした。

「これあげる。マーガレットのおりがみ。ゆみせんせいがおうちにくれてん。お友だちさんどうぞ」

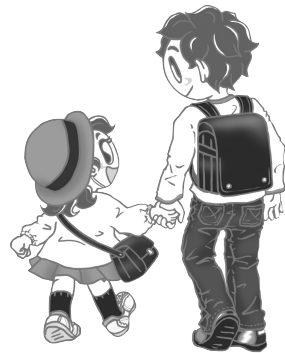
もらったのは黄色のマーガレット。まるで本物のように丁寧に作られている。祐介が「ありがとう」とお礼を言うと、妹はにっこりうなずいた。

「じゃあねー」

手を振る妹に祐介は手を振った。ほらお兄ちゃんも、と妹に言われて健もおずおず手を振り出す。

「また明日な！」

祐介も精一杯手を振った。明日もまた、健と笑えることを願って。





優  
秀  
賞

《優秀賞・一般の部》

## 小説部門

前歯とタイガース

浜田 加代子

昭和六十年（一九八五年）の五月のある日の午後、

「まあ、直人、すごいねえ。りっぱな表彰状  
いただいて」

母の敏子は、目を見開いて大声をあげた。

四年生になってすぐの歯科検診の結果、『いい歯コンクール』に推薦されたらしい。直人は全く知らなかったけれど、今朝の全校集会で、校長先生から名前を呼ばれ、前に出ると、表彰状を渡された。ただ恥ずかしいだけだったけれど、帰って来てそれを手渡すと、母が

泣きそうなくらい大喜びをした。

（一体何がそんなにうれしいのかなあ。こんな紙。叱られるよりはずっといいけれど、今朝のみたいなことはもうこりこりだ）

目立つことが大きらいな直人は、そう思った。けれど、賞品にもらった二四色の色鉛筆は、今使っている物の倍もきれいな色があり、うれしかった。それをランドセルから取り出すと、母に見せた。ぽっちゃりした顔がほころび、真っ白い前歯がきらつと輝いた。敏子は、

「なにか、お祝いのご馳走しなくっちゃね」

などと言いながら、いそいそと買い物に出かけて行った。敏子にとって直人の表彰状などというものは、前代未聞のことだったのだ。直人は、だまって自分の部屋へ入り、色鉛筆を一本ずついいねいに並べた。

七月になり、学校の周りの山々の緑がぐんと濃くなった。

チャイムが掃除の時間を知らせる。直人は、廊下を雑巾がけする係りだ。みんなと一緒に机を運んだりすることが苦手なので、ひとりのできる廊下掃除を、班長に割り当てられることが多かった。顔をまっ赤にして汗びっしょりになりながら、もくもくと拭いていた。

後ろで、背の高い相田俊介と眼鏡をかけた大井田潤が、にやにやしながら小さい声で話していた。

「あいつ、ちょっと押してやろう。どんくさいからひっくりかえるで」

「いつもぼそぼそしゃべるし、返事もせえへん。気持ち悪いもんな」

俊介が、片手で直人の肩を押した。それから、二人はすばやく逃げ去った。直人は、力を入れていた腕がガクツとなり、顔を床に強く打ち付けてしまった。ゆっくり立ち上がった直人の口から血があふれ出て、白いシャツをまっ赤に汚した。

「キャー、先生！」

バケツを持って教室から出てきた女の子が、叫び声をあげた。

直人の生え揃ったばかりの大人の歯、上の前歯が二本折れてしまったのだ。幼い時からほとんど泣くことがなかった直人は、ただぼーっと口から血を垂らしながら立っていた。担任や保健室の先生に、やさしく色々訊ねられたが、その時の様子をうまく説明できず、そのまま歯医者へ連れて行かれた。そこへ息を切らしながら駆け付けた敏子と、家に帰った。そして、クラスでは、『どんくさい奴』のレッテルが、またまた大きくなってしまったのだ。

九月も半ば、学校の周りの田んぼでは、稲の穂が黄色に色づき重そうに首をたれている。しかし、直人はそんな自然の移り変わりに全く興味がなく、だまって毎日登校するだけだ。

今日は、校門のところで、きちんと背広を着た校長先生がにこやかに立っている。

「おはよう」

「おはようございます」

子どもたちも、元気にあいさつする。上級生の中には帽子を取っている子もいた。

「おはよう」

校長先生に声をかけられた直人は、緊張して立ち止まると、足を踏ん張って声をふり絞った。

「おはよう」

ところが、校長先生は言った。

「先生には『おはようございます』ってあいさつしようね」

直人は、きょとんとした。どうして『おはよう』ではいけないのか、分からない。直人は、いつも言われた言葉を、そのまま返す癖がある。相手によって言葉づかいを変えなければならぬことが、とても不思議でたまらなかつたのだ。しかし、どう訊ねたらいいの

かも分からず、いつもいつも頭の中がもやもやしていた。

給食の時間になった。カレーシチューをほおばりながら、俊介と潤が興奮して話している。二人は大のタイガースファンで、帽子は一年中タイガースもののしか被らない。そして、直人も、同じ帽子を被り、タイガースを応援していた。

「見たか！ 昨日の岡田のサヨナラヒット、前の日はホームランやで。かっこええなあ」

「タイガースの優勝も目の前や」

「マジック十七やで」

直人も、昨日の試合はテレビで見っていた。

（真弓もベースもすごかった）

そのことを話したいと、直人は時間をかけて、頭の中で組み立てた。食べながら話すのは無理なので、手を止めてからやと声を出した。

「掛布のヒットもよかったな」

勇気を出してやと声を出したのに、二人

は、直人を白けた目で見た。

「もうその話はすんどんや。今はマリオファミコンの話」

俊介が、あきれたように笑った。そして、独り言のように言った。

「あーだれかファミコン持ってないかなあ」  
「ぼく、持ってる」

小さな声で言った直人に、俊介は、目をキラキラさせながら顔を近づけた。

「えっ、あるん。うわあ、すごいなあ。今日遊びに行ってもええか？」

その日から、直人の家にクラスの子が、何人もやって来るようになった。流行りのファミコンがあり、発売されたばかりのマリオのゲームができたからだ。みんなが、代わる代わるコントローラーを持って必死だ。

「はい、ゲームオーバー。交代」

直人はすぐに失敗するので、ほとんどの時間誰かがするのを、にこにこしながら見ていた。

（お友だちと遊べるといいと思って、無理してこのゲーム買ってよかったわ。直人があんなにうれしそうにしてるもの）

敏子は、そう思いながら、せっせとジュースやお菓子を運んだ。家に友だちがやって来ることは今までなかったのだ。

直人は、早口や大きな声が苦手だ。頭の中がワワンとなつて、何を言われているのか分からなくなってしまう。でも、不思議なことに今は平気。友だちが自分の部屋で、テレビ画面を見ながら勝手なことを話しているのが、うれしくてたまらなかったのだ。

他にも、直人は苦手なことがたくさんあった。人の名前がなかなか覚えられないのもその一つだ。

こんなこともあった。ある朝、前の席の女の子が、直人の方を振り返ってにっこりして言った。

「おはよう」

（えっ、だれ？）

びっくりした直人は、目を見張った。

「どうしたん？ 変な顔して。そんなにおかしい？ この髪型」

そう言うのと、その子はブンと前を向いてしまった。

直人は、だまっただまうつむいた。

（前の席の子、昨日は髪長かった。顔覚えられへんから、僕、一所懸命『髪の長い子』って覚えてたのに。なんか怒ってる）

そう思ったけれど、口に出すことはできなかった。その女の子はそれ以来いつも直人をにらんでいた。

また、先生や母から、繰り返し注意されることの一つに、

「相手の目を見て話さない」

ということがある。直人もがんばって顔を見ようとする。

（でも、僕、相手の顔見てたら『うわっ、怒ってる、どないしよう』『なんか悲しそうや、どないしたらええんやろ』そんなこと考えて、

何をしゃべってるのか分からんようになる。

そやから、目を逸らして話聞こうとしてるんやけどなあ）

直人は、それをうまく説明できないから、いつもしかられてしまうのだ。

二期も終わろうとするある日の教室、

「はい、算数のテストを返します。今回は、クラスで一人だけ百点でした」

うわー、という声上がる。

「堤田直人君、すごいわね。よくがんばりました」

先生が、テストを返してくれた。

「やっぱ、算数博士やあ」

そんな声も聞こえた。

直人は、算数が好きだ。答えが一つで、余計なことを考えなくても、一直線にすつと、頭が働いて答えが出てくるからだ。漢字のテストも、得意でいつも百点だ。

しかし、お話の中の主人公の気持ちなどを



尋ねられても、何も答えられない。

（その人の気持ちなんてなんで分かるんだらう）

さつさと答えている子が不思議でたまらなかつた。

また、その時その時の記憶はいつまでもはつきりと残っているが、それがバラバラでつながらない。毎日の暮らしが規則正しく進んでいるときは大きな問題は起きないが、急に予定が変わると、一旦記憶したことをリセットしなければならず、それを瞬時にやることはとても無理なのだ。だからパニックを起こしてしまう。いつも肩に力が入り、緊張ばかりする毎日だった。

五年生になるとき、父の仕事の都合で、遠くの大きな街に引越すことになった。直人はそれがとても嫌だったけれど、どうすることもできず、ただだまって我慢していた。また新しいところで暮らしていかなければなら

ないと思うと、不安で押しつぶされそうだったのだ。

春休みになって、明日は引越しという日、俊介と潤が、直人の家にやって来た。

「お別れやな。元気でな」

「あんな、夏にな、そのう、廊下でな」

「うん、こけたやろ、後ろから俺が押ししめた。あのとき知らん顔してて、ごめんな」

「一緒におったのに、なんも言わないでごめんなさい」

「歯折れてしまつて、ごめんなさい。」

そう言つて、深く頭を下げた。直人は、うまく言葉が出てこなかつたけれど、きちんと話してくれたことが、とてもとてもうれしかった。だからだまつて、にこつと笑つた。それは、とびきりの迷いのない笑顔だった。ちよつと黄ばんだ前の差し歯二本に太陽が反射して光つた。

それから十五年が過ぎ、直人は二十五歳に

なった。背はぐんと伸びたが、ぼっちゃり体型は相変わらずだ。

今までトラブルばかり抱えて生きてきた。楽しいことはほとんどなく、嫌なこと、辛いことばかりの連続だった。友だちはいなかったし、数学推薦で入学した大学も、退学してしまった。その後、求人情報誌やハローワークを介しての仕事も長く続かない。どうしても周りの人と合わせられないのだ。我儘をするわけではないのだが周囲の人をいらつかせてしまう。

「やる気ないなら帰れ」

あるとき、アルバイト先の上司が怒鳴った。そう言われた直人は、黙ってそのまま帰った。翌日出勤すると、

「勝手に帰ってしまうような者はもう来なくていい。『クビ』だ」

（帰れと言われたから帰ったのに。やる気がないのではなくやることが分からなかっただけだったのに）

そう思ったが、うまく言えず、仕事を失くした。

また、流通センターで仕事をしていたとき、工場長に、

「君はとても真面目だ。フォークリフトの資格を取ってがんばった方がいいよ」

そう言われて、会社の費用で資格を取った。直人も、頑張ろうと張り切ったのだ。

「これからは、自分で段取りを立ててやってほしい」

しかし、直人には、それができないのだ。指示されたことはこなせるが、仕事を自分で組み立て順序だててやることが非常に難しい。まごまごしていると叱責される。そうすると頭がワワワーとなって、もう何が何だか分からなくなってしまうのだ。

結局、それも辞めてしまった。

木枯らしの吹く夕昏、直人は、気づくと、知らないビルの上立っていた。フェンスをよじ登り越えた。

（僕は、性格が悪いんだ。直そうと頑張っても直らない。友だちもいない。上司には叱られてばかりだ。何をやってもうまくいかない。もう生きている値打ちなんてない）

風の冷たさが肺の中に入って来た。下を見ると黄色く色づいた葉がザワザワと揺れていた。体がガクガクして、一步を踏み出すことがどうしてもできず、またフェンスの内側へもどった。苦くてすっぱいものが口にあふれ、屋上のコンクリートに吐いた。何も食べていなかったので緑っぽいものだけが出て、そこにシミを作ってしまった。持っていた新聞紙で必死で拭いた。

「ウオーウオー」

喉が痛くなるまで叫び続けた。気がつくとも頬がぐちよぐちよに濡れていた。フェンス越しに空を見上げた。自然には興味のない直人だったが、青い空をオレンジに染めて沈んでいく太陽がまぶしかった。

「きれいやなあ」

泣きながらそう思った。それからとほとほと家に帰った。

その頃、直人は、家族とも話さず、いつもいつも独りぼっちだった。父は仕事が忙しくて、顔を合わせることもあまりなかったけれど、彼にはいつも厳しく接し、溝ばかりが深くなっていた。母は顔色を窺うようにして、心配そうにため息ばかりついていた。

そうしているうち、母に強く勧められて、しぶしぶ大病院の『神経精神科』を受診したのだ。

「堤田直人さん」

名前を呼ばれて入っていくと、何回か受診して顔なじみになった先生が、静かに座っていた。

「こんにちは」

「こんにちは」

「今日は検査の結果、診断名をお伝えしますね」

そう言つて、回転椅子をこちらに向けてと

直人に向き合った。

『ろっこうおろーしに』

直人の耳に叫ぶような歌声が聞こえてくる。七月の焼けるような日差しがまだ残っている甲子園球場にやって来たのだ。直人は、相変わらずタイガースが好きだ。ずっと低迷していた阪神タイガースに優勝の光が見えて、思い切つて、電車を乗り継いでやって来た。

あの診断の日から、三年が過ぎていた。

午後六時のプレイボールの前に、何か食べておこうと、売店の前の行列に並んでいると、後ろから、誰かが直人の名前を呼んだ。

「もし違っていたらすみません。堤田直人君ではありませんか?」

驚いて振り向くと、直人より頭一つ分背の高い、なんとなく見た覚えのある男性が、ここにこしながら立っていた。

「えっ、そうですけど、あの」

「おーやっぱり堤田か! 俺、相田俊介。それにしても、小四のときと雰囲気全然変わらんなあ。直人も、タイガースファンやったよなあ」

直人は、どぎまぎしながら、

「お、お」

と、なんとか声を出した。

「俺らが四年の時以来やで。待ちくたびれたよなあ、タイガースの優勝がらみ。うわー、なつかしいなあ」

「うん」

直人も思い出し、懐かしくて自然に笑顔になった。

「俺、今、大阪で働いてるんや。おー、なんちゅう偶然。今、大井田潤と来てるんや。直人は、誰か連れおるんか?」

「いいや、ひとりや」

そう言うのと、

「帰り、三人でどっかで飲もうや。こんな偶然、もったいない」

そう言うと、俊介は、駅前の店を指定した。  
「今日は絶対勝つな。もう優勝や！ 小四の時の再来や」

そう言うと、俊介は勢いよく手を振って、人ごみに紛れて行った。

すっかり暗くなり、試合は終わった。

「かんぱーい！」

三人は、タイガースのユニホーム姿であふれている居酒屋で、テーブルを囲んでいた。

「マジック点灯にかんぱーい！」

「エース井川にかんぱーい！」

何度もビアジョッキを合わる。直人は、普段はほとんど飲まないのだが、今日は特別だ。

「それにしてもすごい偶然やなあ。俺、大阪で会社勤め、営業やってるんや。直人は？」

俊介にそう言われて、直人は、口ごもりながらも勇気を奮い立たせて、ボソツと言った。

「僕、『アスペルガー』なんや。病院でそう診断されたんや」

「なんやそれ、聞いたこともない。内臓の難

しい病気か？ ビール飲んでもええんか」

横で、にこにこジョッキを傾けていた潤が、眼鏡を持ち上げるようにして、前のめりになった。

「俊介、違うがな。それ、『広汎性発達障害』いうて、病気とは違うけど、コミュニケーションがうまくいかないんや」

直人は、目を見張った。そんなことを知っている人は周りにはいないのだ。

「あつ、ごめん。俺な、障害者施設で相談員やってるんや。そやから、少しは分かるで。

今までずつと、しんどかったやろ」

突然そんなことを言われて、直人の目に涙が盛り上がった。

「小四のときも、直人って、どんくさいのに算数だけはバリバリできてたやん。あつ、ごめん」

困ったように笑う潤に、直人は笑顔を向けた。

ほっとした顔の潤は、続けた。

「しゃべるときは、食べるんやめるし、おんなじことばっか言うてるし、変な奴やなあって思ってたん」

「へー、そうなんかあ。知らんかった」

そういう俊介に、潤は真剣な目を向けた。

「まだあまり知られてないんや。だから本人は苦労してる。サボってるとか思われて」

それから、直人に向き合うと話し続けた。

「そやけどな、いろいろ研究が進んでるんや。俺なんか全然分かってないけどな。これだけは言える。これからもっと世の中に知られて支援が広がる。大丈夫やで、直人」

俊介が、ビールのジョッキをテーブルにとどぶつけた。

「そんなもんは関係ない。直人は直人や。おまえの笑顔見てたら、こっちまでほっとするわ」

そう言った後、真剣な顔でそっと言った。

「ずっと気になってたんやけど、前歯やっぱ欠けてるな」

潤も、のぞきこむ。

「あのときのケガやな。本当に本当に申し訳ありませんでした」

深く頭を下げる二人に、直人は照れたように笑いかけた。

「これはな、差し歯を治さんとあかんのやけど、僕が歯医者キャンセルばっかしてるからや。もう気にせんとって」

突然、俊介がジョッキを持ち上げた。

「かんばーい！ 阪神タイガース優勝」

「かんばーい。堤田直人、最高！」

直人も笑いながら声を合わせる。

「かんばーい！」

それは、とびきりの迷いのない笑顔だった。

帰りの込み合った電車の中で、直人は、本当に久しぶりに愉快な気分が満ちているのを感じていた。体中がホカホカするのはお酒のせいだけではなかった。

（僕も何かやれることあるかも。いや、きっとある）

電車の振動に任せて、直人はそんなことを  
考え始めていた。そして、

（明日は絶対歯医者予約取ろう）  
とも。

窓に深夜の街が流れていく。そこに、赤く  
なった直人のやわらかい笑顔が、映っていた。



《優秀賞・学齡児童生徒の部》

## 小説部門

私の中に咲くさくら

吉延

稔

ゆらゆらと、透き通るように輝く。そんな木漏れ日の差し込む長い小道を通り、今日も私は図書館へ行く。

週末に図書館に行くのが、私の一つの楽しみだ。

ポカポカと暖かく、首筋をそつと撫でる四月の風はとても心地がよい。今日は最高のお散歩日和だ。朝早く出た甲斐があった。

この道の桜も風が吹くたびに花びらはひらひらと、切なく散っている。足元は、まるでいちごミルクが一面に溢れたように、淡い桃

色になっていた。

私には、とても仲の良いおばあちゃんがいる。血の繋がりはないが、家族のように振る舞ってくれる優しい人だ。

そういえばおばあちゃんは前にこんなことを言っていた。

「桜は儂く散る。一ヶ月程しか咲くことができなないんだ。それでも毎年、同じように綺麗な花が咲いているだろう。春が来たと告げるように。そんな、希望を、勇気を与えてくれる桜は美しいんだ。楓ちゃんもそんな人になれたらいいね」

桜みたいな人、それがどんな人か、今はピンとこない。いつか分かるかな。そう思い、私はてくてく歩いた。

中学生になった私は人間関係に不安を抱いていた入学前の私を馬鹿馬鹿しく思う。すぐに友達はできたし、クラスみんなは優しい人ばかりで、毎日が楽しい。私は幸せ者だと思ふ。



図書館に着く頃には、僅かに汗ばんでいた。そんな私をひんやりと冷たく、あの独特な本の香りのする空間が包み込む。これぞ至福の時。そう思いながら、借りた本を返して、また新しく本を借りた。

今日もフリースペースで本を読む。静かな図書館は私を本の世界へといざなう。一時間ぐらい読んだ頃に、ふわふわとまどろみが覆う。もうちょつと読みたい。でも、睡魔には勝てなかった。少しだけ休憩しよう。ほんと少しだけ。目を閉じた私は、一瞬にしてすやすやと眠ってしまった。

目が覚めた時には、もう午後三時。五時間ぐらい眠っていたようだ。しまった。お母さんには十二時に帰るって言ったのに。きつと、かんかんに怒っているだろう。帰ろう。やってしまったことはしようがない。ちゃんと謝ろう。そう思い身支度をしようとして席を立つと目の前の席には、同じクラスの渡会君がいるではないか。寝顔を見られたかもしれな

い。私は顔を赤らめながら、渡会君に軽く会釈をして図書館を後にした。

家に帰ると案の定、お母さんにこつ酷く叱られた。

次の週末も、図書館に向かった。

先週と同じ席に向かうと、そこにはまた渡会君がいた。声をかけようか、かけまいか。思い悩んだ末に声をかけてみることにした。

「おはよう。こんなとこで奇遇ね」

渡会君は私の目を見つめるだけだった。私は続けた。

「渡会君よね。私、同じクラスの七瀬。話すのは初めてよね。少し話さない？」

彼は、はてなが浮かんでいるような顔をしてこちらを見ていた。まあ無理もない。同じクラスとはいえど、話したこともない人から突然声をかけられたら驚くことだろう。

彼は事故にあって下半身が不自由になり、車椅子の生活を送っている。だから学校でも、みんな優しく接している。少し度が過ぎ

ている気がするけど。

「本、好きなの？」

彼はこくりと頷いた。でもそれだけだった。何だか気まずい空気が漂っている。何か言わなきゃ。

「部活動、どこに入るの？」

彼は、困惑の顔を隠せなかった。

「私は美術部に行くつもり。絵を描くのが好きなんだ」

「な、七瀬さん、美術部に入るの？」

彼は、食い付くように口を開いてくれた。

「うん」

「僕も美術部、入ろうと思ってるんだ。」

心を開いてくれた気がして、何だか嬉しかった。少し彼の顔が和らいだ気がする。

「一緒ね。嬉しいわ」

そこでふつんと会話が途切れた。私は沈黙が苦手。だから自分から話題を振り続けた。

「どんな本が好きなの？」

少し考える素振りをして、彼は答えた。

「僕は有名な作家さんの本ならジャンルを問わず読むけど、恋愛小説はあまり読まないかな」

「同じね」

彼と話すのが楽しくなって、時間なんて忘れていた。話せば話すほど気になることが出てくる。私は聞いた。ずっと気になっていことを。

「車椅子生活って大変そうに見えるけど、実際はどんな感じなの？」

彼は苦笑いをした。

「確かに色々制限はあるけど、何とかやってるよ」

「制限って、道路に通りにくいところがあるって、行ける場所に制限があるってこと？」

「そういうことでもあるよ。階段とか。他にも、エレベーターとか、細い道とかで、周りに迷惑がかかってないかなって、心配になることもよくあるよ。でも、車椅子に乗っている人はきつと、みんなそう思っているだろう

から、ちよつとは我慢しないと」

彼はもう一言言いたそうに口を開いたが、

私は、咄嗟に止めることができずに発言した。

「私たちが思つてる何倍も大変なのね。可哀  
想に」

「えっ」

彼は、驚きと悲しみが入り混じつたような  
複雑な表情をしていた。

「えっ？」

「僕、もう帰るよ。用事があつたのを忘れて  
た」

彼はそれ以上何も言わずに、曇つた表情で  
エレベーターの方へ向かつた。

その日から、図書館で会わなくなつた。

ずっと心に引っかけかりがあつた。私は彼を  
傷つけた。きつと傷つけたんだ。でも、何が

いけなかつたのが私には分からなかつた。

彼はいつも通り学校には来ていたが、廊下  
ですれ違うだけで、二人で話すことはなかつ

た。彼は陰鬱の顔を浮かべていた。

その日は帰りにおばあちゃんの家に行くこ  
とにした。

おばあちゃんの家は図書館に行く道を奥ま  
で進むと見えてくる。その家は丘の上にあ  
り、全て木で造られた家だ。周りの家とは少  
し違う雰囲気がある。まるで、私たちを見  
守つていようだつた。

道中、いつもこの道を綺麗にしているおじ  
いさんに出会つた。

「こんにちは」

「こんにちは。楓ちゃん、もう中学生か。は  
やいねえ。勉強頑張つて」

「はい」

私は、はきはきと言って足早に歩いた。応  
援してくれる人がいるとやっぱ嬉しい。

丘を登りきつて、今日もドアをノックする  
とおばあちゃんが笑顔で迎えてくれた。

「こんにちは。楓ちゃん」

「こんにちは。おばあちゃん」

私はまるで自分の家かのように、おばあ

ちゃんの家に入った。

「久しぶりだね。前会った時は、小学六年生だったかな。確か、中学校に入学するのが不安とか言ってたよね。今日はどうしたんだい？」

「今日は少し悩みを聞いて欲しくしてきたの」

すると、おばあちゃんは私を優しく包むような笑顔を作って答えてくれた。

「そうかい。もちろん聞くよ」

「ありがとう。実はね、前、図書館で中学校の同級生の男の子に会ったの。彼は車椅子に乗って生活していて。私、仲良くなりたくて、たくさん質問したの。それでね、一番気になって大変そうって。彼はね、優しく答えてくれたの。でもね、私、話の途中に『大変なのね。可哀想に』って声をかけた時、彼は突然顔を曇らせて用事があるって帰ってしまったの。それから一言も話してないの」

私は涙を堪えながら話した。

「そうか、そうか。私も同じようなことを聞いたことがあってな。その子も、車椅子に乗っていてな。周りの人のように普通に接して欲しいって言っていたよ。同情や哀れみの目で見られず、普通の友達として接して欲しいって。だからきつと、その男の子もそれと同じような悩みの種を抱えているんじゃないかな。きつと、その男の子は楓ちゃんのが嫌いなわけではないはず。楓ちゃんが傷つけたと思うなら、素直に謝ったらいいんじゃないかな」

「ありがとう。今度、二人で話してみる」

週末、私は本を返しに図書館に行った。でも今日は返すだけ。受け付けに行つて本を返すと、後ろを渡会君が通り過ぎた。どうしよう。今まで、こういう場面で私は勇気を出せなかった。でも、今動かないとずっとこのままになるかもしれない。私は中学生になったの。自分でなんとかしなくちゃ。

彼に追いついたのは、あの桜の道だった。

今では、散った花びらもほとんどなくなっていて、木には葉っぱが生い茂っていた。

「渡会君。渡会君」

彼はこちらに振り返り、車椅子を止めてくれた。

「渡会君。少しお話させてもらってもいい？」

彼は何も言わずに暗い顔をしてこちらを見ていた。

「私、あなたの気持ちも考えずに不用意な言葉であなたを傷つけてしまった気がする……。本当にごめんなさい」

その一言で、彼の暗い顔も一瞬で霧の晴れるような顔になった。

「傷ついてないよ。僕の心が弱いだけ。僕の方こそ、素っ気ない態度取ってごめん。僕、ずっと謝ろうと思ってたんだ。でも、なかなか一歩が踏み出せなくて。ありがとう」

「でも、私……」

「優しい人はみんなこういうんだ。可哀想、

大変だねって。気にしなくていいよ」

彼はにこりとほにかんだ。

「私、前の話の続きが聞きたいの」

「前の話って、車椅子生活のこと？」

「そう。その話の続き」

私はずつと気になっていた。彼には悩みの種があるように見えて。

「いいよ。不便なことがあっても我慢してきた。中学校はバリアフリー化が進んでいて、過ごしやすかったから困ることは無かったんだ。それに、みんなは誰よりも僕に優しく関わってくれて、車椅子に乗った僕を受け入れてくれてるようで嬉しかった。だけど、車椅子に乗っているだけで、クラスメイトから他の人と違う対応をされて、いつしか人間じゃないと感じるようになったんだ。いじめられでもない。だけど人とは違う生き物のように感じるんだ。それが嫌で」

「そうなのね。私も、渡会君には特に気をつかっていた気がするわ。ごめんなさい。学校

のみんなにもその気持ちを伝えなきゃ。私、手伝うよ」

「僕、ずっと話せなくて、一人で悩みを抱えていたんだ。誰にも言えなかった。でも、七瀬さんには言えたんだ。だから、自分一人でも、この気持ちを伝えられる気がする。頑張ってみるよ」

彼は意を決したような声で言い放った。

「きつと渡会君ならできる。頑張つて。私、応援するよ」

私にできることはこれだけだった。

翌日、私はいつもより少し早く家を出た。朝の澄んだ空みために、私の心は澄み渡ってはいなかった。渡会君のことが心配で、不安な気持ちは片付かなかった。

教室に入るとそこには、担任の先生と渡会君がいて、どうやら何か話しているようだった。私は、邪魔してはいけないと思い、気づかれないように静かに身支度を済ませ、本を読もうと思っていたが、すぐに気づかれた。

控えめな声で二人に挨拶を済ませると、私は本を読むことにした。

私は、渡会君が一人でやると言ったから彼には声をかけずに、遠くから応援することにしました。

ホームルームの時間、渡会君が前に行った。頑張つて。私はそう思うことしか出来なかった。

「こ、この場を借りてみんなに聞いてほしいことがあります。このクラスのみんなはいつも優しく、特に僕には、僕の足のせいだろうけど、すごく優しく。ありがとう。そんなみんなに今日、聞いてほしいことは、僕だけ特別扱いしないでほしいということ。できる限り健常者のみんなと同じように接してほしいということ。こんな足でできないことが多いのもわかっている。だけど、できることまで自分でできないのは、みんなと違う生き物みたいな気がして、特別扱いされるのは、正直、つらいです」

ぐっと握る渡会君の拳が目に入り、私の拳にも力が入った。

「すぐわがままを言ってると思います。でもちよつとずつでも冗談を交えたり、できなかったことができたり、そんな、普通な学校生活をみんなと送りたいと思うんです。どうかこの気持ち分かってください」

渡会君は深く頭を下げた。

「渡会君、ごめんね。そんな気持ちにさせてたなんて。私、気が付かなかった」

クラスの一人がそう言った。

「俺も、気づかなかった。ごめん」

また一人そう言った。すると口々に謝る声が上がった。渡会君が自分の席に戻ると、担任の先生が話し始めた。

「渡会君は今朝、このことを相談してくれました。渡会君は勇気を出して、この場で話をしましたね。渡会君が話した後、先生が何も言わなくても、みんな自然と謝りましたね。

先生は感動しました。本当に優しくてあなた

かいクラスです。渡会君は、みんなと違うように関わられるほかに、可哀想や大変そうと言われるのも、嬉しくないと言っていました。みなさんは、とても優しい人たちなので悪気があってしたわけではないと思います。悪気がなく放った言葉にも、相手が嫌に思うことがあります。だから言葉には責任を持って気をつけて使いましょうね」

そのままいつもよりあなたたかい雰囲気での一日が過ぎて行った。

その日から、渡会君は前より生き生きとしていて、楽しそうにしていた。きつと彼の心は朝の澄んだ空のように澄み渡っていることだろう。私もそうだ。

「七瀬さん。この前、相談にのってくれてありがとう。七瀬さんのおかげで、毎日が楽しいよ」

「渡会君が楽しそうだなにより。私はそれが一番嬉しいよ」

彼は太陽のように明るい笑顔をしていた。

その笑顔を見てやっと分かった。おばあちゃん  
の言っていた桜みたいな人の意味が。伝え  
に行こう。おばあちゃんのところへ。

私は帰りにおばあちゃんの家に向かった。

丘を登るとそこには、大きな木が一本立っ  
ていた。あれ？ おばあちゃんの家がない。  
おばあちゃんはどこ。どういうことか分から  
なかった。こんなことが起こるのは本の世界  
だけ。私は唐突すぎて状況が飲み込めなかつ  
た。

「こんなところで何をしているのかい」

声をかけてくれたのは、おじいさんだった。

私は信じてもらえないと思いつつも全て  
を話した。

「なるほどねえ。そういうええ聞いたことがあ  
るよ。この桜の木は町の御神木のような存在  
で何百年も前からここに立っているんだよ。  
この桜の木には言い伝えがあつてのお。悩み  
の種を持った人にだけ老婆が現れて解決への  
道しるべを与えてくれるらしいんだ。きつと

その老婆に会ったんだろ。不思議なこともあ  
るもんだねえ」

「そうだったんだ。ありがとうございます。

言い伝えは信じるべきかもしれませんが」

「そうだねえ。それじゃあ道の掃除をしてく  
るよ」

そう言っておじいさんは丘を下りていっ  
た。この地球には私の知らない世界が広がっ  
ている。そう思った。

「おばあちゃん。私、おばあちゃんの言つて  
た桜みたいな人になれた気がするよ。渡会君  
にとつての桜に」

私は丘に立つ一本の桜の木に向かつて言っ  
た。きつと届いてるはず。風が私の首元を  
そつと撫でた。私を包み込むように。

今日も私は図書館に行く。いつか桜が咲く  
この道を通つて。





《優秀賞・一般の部》

## 随想部門

私だからできること

近藤

音花のなか

みなさんにとって普通とはなんですか。

普通とは誰が決めるものなのでしょうか。

私は中学2年生のとき、病気で視覚障害者になりました。それまで地域の中学校に通い、周りには健常者ばかりがいる環境で過ごしてきた私にとって、それはとても辛いことでした。

目に違和感を感じはじめたのは、少しずつでした。はじめは「遠くが見えにくいなあ」と軽く考えていました。それから教科書や黒板が見えにくくなり、しまいには自転車で人

とぶつかったり、信号が見えず轢かれそうになったりと一人では歩けないほど視力が低下しました。気づいた時には両目の視野が半分欠けた状態でした。病気が診断され、視力の回復が難しいと聞かされた時は、ただただ絶望しました。現実を受け入れられず部屋に引きこもりもうなんで泣いているのかさえわからなくなるまでずっと泣いていました。朝起きたらまたふつうに戻っていると信じて眠る夜も何度もありました。そう苦しんだのは両親も同じでした。母が言った「元気で産んだはずなのにこんなことになってごめんね」という一言が私は忘れられません。

それから辛いことがたくさんありました。今まで何気なく見ていたものが見えなくなっていると気づく時、できていたことができなくなっていることに気づく時、言葉では表せない大きな喪失感がありました。友達と比較することもありません。自転車で自由に遊びに行けなかったり、何かを見てみんなが笑っ

ているのに見えないから笑えなかったり、どうして自分だけがこんな辛い思いをしなきゃいけないんだろうと思っていました。盲学校への転校を決めたのも自分が周りと違うことが嫌という気持ちからでした。

しかしこの選択がわたしを大きく変えました。盲学校に入ってから驚くことばかりでした。そもそも私はこの学校を知るまで視覚障害者という言葉を知りませんでした。目が悪い人のことをそう呼ぶのかと初めて知りました。視覚障害者の中に全盲と弱視と呼ばれる人がいるのを知ったのもその時でした。視覚障害者と接することも初めてでした。最初はどう接していいのか分からず戸惑うこともありましたが、明るい人が多くてすぐに馴染むことができました。そして学校に慣れていくうちに今まで自分が障害者に持つイメージとは違うことにも気付かされました。「かわいそう」というイメージです。テレビなどで障害者をみるといつも、大変そうだな、かわ

いそうだな、そんなふうに思っていました。でも自分が障害者になり、同じ障害者と接してみると全然かわいそうなんかではありませんでした。むしろ明るい人が多くて暗く沈んでいたわたしの心にも光が差し込んだようでした。

障害者を扱うテレビなどで逆境をのりこえてという言葉をよく耳にします。私は逆境という言葉に違和感があります。逆境とは苦労の多い境遇という意味の他に不運な境遇という意味があります。健常者と同じように楽しく生きている障害者は多くいます。そんな私たちに逆境という言葉は似合わないと思うようになりました。

ある時、生まれつき視覚障害を持つクラスメイトが「普通になりたい」と言っていました。彼女のいう普通は健常者を指すのだと思います。私にとっても普通とはずっと健常者でした。かつて自分が健常者だったことや周りが普通だと思いついていたことからだと思

います。ですが今の私にとつての普通は視覚障害者になっていきます。この階段は視覚障害者には見えにくいなあ、この言い回しは視覚障害者にわかりにくい。気づいたら視覚障害者として発想している自分がいました。私にとつては障害者も普通です。彼女のようにならずに普通でいたいと思ってしまうのは、社会から障害者に持つ偏見が残っているからだと思います。そして私たちを知らない人がたくさんいるからだと思います。

小学校の時、ある男の子が勉強の苦手な子に対して「お前障害かよ」と言っていたのを聞いたことがあります。電車で知的障害のある人が乗ってくるとジロジロと見たり、くすくす笑ったりする光景を見たこともありません。社会が作り上げた障害者のイメージで縛られている人は多くいます。私は身をもってその間違いを知りました。私は多くの人にこの間違いに気づいて欲しいと思っています。健常者だった私だからこそ伝えられることが

あると思います。これから出会う人たちに、私と出会うことで障害者に対する考えを変えてほしい、関心を持ってほしいと思います。

私は今年盲学校を卒業し、大学に進学しようと考えています。この学校のように障害者に理解がある人ばかりではないでしょう。また違った苦しさがあるかもしれません。そういう人たちに少しでも障害者に関心を持ってもらいたい。そのために積極的に話しかけ、周りを明るくできるような存在になりたいです。

そして自分が助けてもらえばかりでなく他の人を手助けしていきたいです。ある意味どこにもいる存在でありたい。みんなが自分を普通だと思える世のなかになってほしい。そのためにも前向きに明るく自分らしく生きていきたいと思っています。



《優秀賞・学齡児童生徒の部》

## 随想部門

差別のない社会へ

山下  
惇斗<sup>あつと</sup>

僕には、4歳年下の妹がいる。生まれつき脳に重い障がいを持っている。だから、歩くことも、しゃべることもできない。けれど、体調の良い日はいつも笑顔で、周りの人を元気づけている。

妹がいると、お出かけをすることも簡単なことではない。例えば旅行に行くとき、車の中でも、吸引をすることが必要で、母が妹の隣に座って吸引をしないといけなかった。さらに、遠くへ出かけることもかなり難しいことだった。

ある日、家族で旅行に行って、買い物をしている時に、ある男の人が、「じゃまだ」と言った。他にも沢山人がいたし、その人をじゃましていた訳でもなかったのに、そんなことを言われた。その時、僕はこう思った。

「なぜ自分たちが言われるんだろう」

この出来事から、障がい者に対する差別や偏見を持っている人が少なからずいることがわかった。

妹は、地元の小学校ではなく、家から往復一時間の養護学校に通っている。地元の小学校に通えないのは、吸引をするための看護師がいらないからだ。

僕の母は、妹の世話があるので、もともとは働く予定だったが、働けない。これは僕の母だけでなく、障がい者の親は働くことができない人が多い。

妹は、放課後等デイサービスに現在週一回しか通えない状況だ。なぜなら、妹のような重度障がいの子が利用する施設は、看護師の

数が少ないので、なかなか通えない。発達障がいの人が通う施設は割とあるので、重度障がいの人が通う施設も増えれば、妹が楽しんだり、学んだりできるし、父や母の負担も減るので、もっと増えてほしい。

障がい者やその親は、普通の人に比べて負担が大きいということは、妹がいなければ気付かないことだった。周りの人にも、もっと障がい者やその家族の大変さを理解してほしいと思った。妹がいると大変なときや、不便なときもあるけど、大事な家族の一員なので、これからも元気でいてほしい。いつか、障がい者に対する差別や偏見がなくなることをお願いしている。



《優秀賞・一般の部》

詩部門

あなたへ

千春

心が酷く傷つけられて  
気にならないふりをして  
必死にごまかしていても  
体は正直者で

悲鳴を上げているあなた  
あなたのかげがえのない時間は  
あなたを苦しめる相手に  
奪われたりはしない  
ただ家族とともに過ごすだけの居間  
友だちとのたわいもないお喋り  
なかなか会えない

おばあちゃんとのメール

あなたを苦しめる時間ばかりが

あなたの時間の全てであるはずがない

母の大切なあなた

他に代わりのいないあなた

あなたが辛いと母はもつと辛い

いいえ

あなたの方が辛いに決まっている

あなたへと向かう

悲しい出来事が

母に向けられたものなら

どんなに気が楽だろう

あなたは時折

自分のせいだと言うけれど

あなたは少しも悪くない

楽しかった頃の動画を見て

声を上げて涙したあなた

あなたの泣き顔を見て

あなた以上に腹が立って

あなたの前でも涙を堪えられない

不甲斐ない母だけど

誰よりも

あなたを愛しています

だから

覚えておいてください

あなたを大切に想う

たくさんの人がいることを

あなたは

素晴らしいということ





こころは、ポカポカ。

春のあたたかい日ざしをあびているみたいにポカポカ。

あったかいおふろにつかっているみたいにポカポカ。

ふゆはさむいけど、大すきな友だちといるとポカポカ。

どんなところでも、いい気もち。

生きていると、だれかにきずつけられたりきずつけることもある。

いやなことや、かなしいことを言われて、

きずついたこともある。

でも、きつときみやわたしのまわりにいるかぞくや友だちがはげましてずっとそばにいてくれるよ。

いいことあつたら、こころもきつとうれしくなるよ。

じぶんのすきなことをしていると、えがおになつてるでしょ？

それを、ずつとつづけていけば、きつとこころはハッピー。

その気もちが、こころいっぱいになると、たとえ、しんどいときがあつても、それを思い出せば、元気になるパワーがそこにはあるよ。

こころは、わらうからポカポカつて、あたたかくなるんだよ。

こころは、ポカポカとやさしい日や、おんがくがきこえそうなたのしい日もあれば、雨がふつたり、かみなりがなつたりする日もある。



でも、それでいいんだよ。

ころころかわるから、「ころころ」ってよぶんだよ。

かなしいことがあっても、いいことがあっても、ずっところころは、みんなといっしょにいるから、だいじょうぶだよ。

ころころは、ポカポカ。



《優秀賞・一般の部》

## 創作童話部門

赤いかさ

阿江 美穂

さつきからカズちゃんは、妹のユカちゃんを見ながら心の中がモヤモヤしっぱなしです。

今日、お母さんと一緒に新しいかさを買に行ったときのこと、くり返しくり返し思い出されてしかたがないのです。

かさを選ぶとき、カズちゃんはみんなと同じ黄色のかさを迷わず選んだのです。ところが、小学校一年生になったばかりのユカちゃんは赤いかさを選びました。

「学校じゃ、みんな、交通安全の黄色だよ」

とカズちゃんがいくら言っても、ユカちゃんは、  
「ユカは、赤がいい」

と言ってゆずらなかったのです。

そして、今、赤いかさを買ってもらったユカちゃんはよほどうれしかったのでしよう。家の中でかさを広げたりすぼめたりしながら、お母さんに夢中になって学校のことを話しているのです。

（家でそんなにおしゃべりできるなら、外でもしゃべればいいのに）

ユカちゃんは小さいとき、「さ」がはっきり言えなくて「しゃ」になることを近所の子たちからかわれてから、外ではまったく話さない子になっていました。今ではゆっくり話せばちゃんと「さ」が言えるようになってるのに、外で話しかけると困ったような顔をして立ちすくんでしまうのです。

昨日だって、学校の帰りに橋を渡ったところで、ユカちゃんは数人の男の子たちに囲ま

れて立ちすくんでいたのです。

「おい、ユカ。さとうって言ってみろ」

「いや、しゃとうじゃないか」

どっと男の子たちが笑うのを聞くと、カズちゃんは飛んでいきました。

「なにやってるの！」

大きな声で叫びながらにらみつけるカズちゃんを見た男の子たちは、笑いながら逃げていきました。ユカちゃんは少し困ったような顔で笑ってから、カズちゃんの後を黙ってついて帰ってきたのです。

（赤いかさをゆずらなかつたくらい強いところを外でも見せればいいのに）

カズちゃんは、ユカちゃんにそう言ってやりたい気もちでいっぱいだったのです。

そんなことがあった日から何日かたった雨上がりの帰り道のことでした。

カズちゃんは、また橋を渡ったところで男の子たちに囲まれているユカちゃんを見つけ、走って行きました。

男の子たちはユカちゃんの新しい赤いかさを取り上げて、

「やあい、ユカ、かしゃ、返してほしいか」

「かしゃ」「かしゃ」

とはやしたてています。

ユカちゃんは必至でかさを取り返そうとするのですが、かさに手が届きません。

「あんたたち！」

かけてきたカズちゃんのこわい顔を見た男の子たちは、かさをぽおんと投げると走って逃げてしまいました。

赤いかさは橋の下に落ち、川の流れにはまるすのでのところに止まりました。それを見たユカちゃんは、「わあん」と大きな声をあげて泣きだしました。

カズちゃんはランドセルをユカちゃんの足元に置くと、橋の下へと降りていきました。そして、草むらをかき分けて進み、なんとかかさを拾い上げてきたのです。

ところが、このことが翌日の学校で大問題

になったのです。

小学生が一人で川に入ろうとしていたと学校に連絡が入り、緊急にカズちゃんの町の子だけが教室に集められたのです。

カズちゃんの町の担当の先生は、

「子どもだけで川で遊ぶことが禁じられていることは、皆さん、もうよく知っていますね」と、こわい顔です。

みんなはカズちゃんの方をちらちらと見ていましたが、一人の六年生が立ち上がって、「昨日、カズさんが橋の下に降りて、川に入ろうとしているのを見ました」と言いました。

「カズさん、それは本当ですか」

先生に聞かれてカズちゃんは立ち上がりました。でも、何も言えません。言うのと泣き出しそうで、言葉が出てこないのです。

そんなカズちゃんを見たみんなは、カズちゃんを責めるようにひそひそと話しました。

カズちゃんの体はますますこわばって、先生やみんなが見ている前で立ちすくんでしまったのです。まるでユカちゃんのように……。

そのとき、前の方でがたん！と大きな音がしました。

みんなはびっくりしてふり返りました。

そこには、ひっくり返った椅子と妹のユカちゃんの姿がありました。ユカちゃんは、みんなの方を力いっぱいいらんで立っていたのです。

「ちがいます！」

ユカちゃんは、はあはあと肩で息をしています。

「お、お姉ちゃんは、わたしのかしゃ……か、かしゃ……」

ユカちゃんの中から今にも涙がこぼれ落ちそうになりました。それでも、ユカちゃんは肩で一つ大きく息をすると言葉を続けました。

もうユカちゃんの言葉を笑う子は、誰もいません。

「か、さ、を拾いに行ってくれたのです。遊びに行ったのではありません」

こんなにはつきりと話すユカちゃんを見て、誰よりも驚いたのはカズちゃんだったのかも知れません。カズちゃんの体からすうっと力が抜けていくようでした。

ユカちゃんをいじめていた男の子たちは、恥ずかしそうに下を向いています。

先生はその様子を見て、全部分かったようでした。

「ユカさん、話してくれてありがとう。よく分かりましたよ。連絡をしてくださった町の人には、今聞いたことを伝えておきますよ」と、優しく言ってくださいました。

その日の帰り道、カズちゃんは橋を渡ったところにユカちゃんが一人で待っていることに気がつきました。

カズちゃんがかけよると、ユカちゃんはう

れしそうに笑いました。そして、二人は手をつないで家へと帰るのでした。

さて、家に帰ると、ユカちゃんは相変わらずお母さんに夢中になって学校の話をしています。でも、今日の集まりの話はしませんでした。

夢中でおしゃべりをする妹のユカちゃんを見ていても、カズちゃんの心の中にもうモヤモヤはありませんでした。





令和3年度 人権問題文芸作品

『のじぎく文芸賞』

発行 令和3年12月  
編集 公益財団法人兵庫県人権啓発協会

〒650-0003

神戸市中央区山本通4丁目22番15号

兵庫県立のじぎく会館内

TEL 078 (242) 5355

FAX 078 (242) 5360

発行者 兵庫県 公益財団法人兵庫県人権啓発協会

印刷 (株)興正社

